大正國語讀本

巻八

375.9
H019
資料室

41539
教科書文庫
4
810
41-1916
200030
1474

資料室
3759
H019

大正五年十二月二十六日
文部省檢定濟
中學校國語科教科用

保科孝一編

大正國語讀本

東京 合資會社育英書院發兌

廣島大學 教 38326 圖書

大正國語讀本 卷八

目次

一 邦人の性格……姉崎正治……一
二 會津落城その一……柴四郎……六
三 會津落城その二……一三
四 新古今集の歌（韻文）……（新古今集）……一八
五 歌人西行その一……藤岡作太郎……二二
六 歌人西行その二……二七
七 子を法師になして……吉田兼好……三三
八 弟に與へて天理を諭す（候文）……釋澤庵……三七

九　柩前の演説……（シーザー）…四一
一〇　倫敦塔……夏目漱石…五六
一一　漂泊（韻文）……伊良子清白…六一
一二　光頼参内……（平治物語）…六四
一三　壇の浦その一……（源平盛衰記）…七三
一四　壇の浦その二……七七
一五　討入の光景を報ず（候文）……榎本其角…八四
一六　折節のうつりかはり……吉田兼好…八七
一七　熊野落……（太平記）…九一
一八　寛成親王鷹狩の事……（吉野拾遺）…一〇〇
一九　新葉和歌集……（作文五十講）…一〇三

二〇　鉢の木その一（謠曲）……一〇九
二一　鉢の木その二……一二〇
二二　與謝蕪村……藤岡作太郎…一二五
二三　今様三首（韻文）……一三三
二四　蓋世の雄成吉思汗……（成吉思汗）…一三四
二五　希臘の文明……（文藝思潮論）一四三

大正國語讀本卷八

姉崎正治

一　邦人の性格

人誰か禍福の變轉に驚き、命運の變化を歎ぜざらん。福祉を得て歡び、不運に接して悲しむは人の常情のみ。然れども運命の怒濤に抗し、毅然として自己の位置を維持する事をなさず、徒に外界の變轉極りなき境遇・運命に翻弄せらるるが如きは自己の天職と能力とを知らざる者にして、自棄の甚だしき之に過ぎたるはなかるべし。人類自ら人生の

當に勉むべき最高の究極目的と、又之に達すべき天賦の性能あるあり。拮据此の性能を活動せしめ、自ら立つの氣象なき者は人にあらざるなり。

我が日本民族古來感情に富むを以て著し。感情の激する所往々爲し難きの事を爲し、收め難きの功を收めたる事なきに非ず。我が國史の花は一に民族の感情發動に成りし者なり。其の歷史の傳奇的に華麗にして、又美術的に情致あるは此の爲なり。最も感情的に熱血的なる我が民族は、又最も喜怒哀樂の變に富み、怒つては威嚴、十萬の醜虜を退けたる大將軍も、笑つては溫容稚兒をも親昵せしめたり。山なす敵陣を望みて馬蹄の塵と睥睨したる關東の荒武者

も、白面涅齒花の如き平家の公達を殺しては、悲嘆の涙抑へ難く、黑谷の禪房に落飾して一生を念佛に送りしにあらずや。發しては千峰の雲と見まがふ吉野の萬朶の櫻は、實に我が民族の粹なる武士の理想なりき。

然れども熱血的感情的なる者は卽ち外來の事物に感動し易きなり、運命の轉化に對して最も喜び又悲しみ易きなり。此に於て最も感情に富む我が大和民族は又最も運命に退讓し易き人民たるに至れり。之を最も觀易きの例に見るも、一死君國に盡すの心に至りては我が民族の最も他に向つて誇るべき所。しかも一度意の如くならざらんか、君國の爲には千辛萬苦に耐へ、再擧其の目的を達せんとはせず、

却つて櫻花の小夜嵐に吹散ると同じく花々しく死して餘塵を止めざらんと勉むるもの、比々皆然るに非ずや。戰一度利あるや、士氣奮躍百嶮を苦とせずして敵を鏖にせんとするも、事一度敗るゝや速かに死を決して一軍一族、城を枕にして自盡するを名譽とす。小楠公の四條畷に萬古の恨を殘したるも此が爲のみ。鎌倉の故府が、遊子をして當年の血痕を懷ひ、古を偲ぶべき幾多の遺蹟を傳ふるもこれが爲に非ずや。吾人は一概に此等武夫の花々しき最後を非難せんとするに非ず。しかも當年若し正行をして弟正儀の如く百難不撓事に當らしめば、南朝の行末は如何なりしかを思ひ、また尊氏をして弟直義に聽かずして徒に自盡せ

小楠公　楠正行。正平三年（一三〇八）戰死。時に年二十三。

正儀　正行の死後吉野朝に仕へて屢々足利の軍を討つ。一度足利に降服したりとの說あれど審かならず。元中年間病みて卒す。

尊氏をして云々　九州に於て菊池の大勢に攻められ、失望して自殺せんとす。直義之を諫止す。

しめば、足利氏の天下は如何に終りしかを思はば、感慨轉〻深からざるを得ざるものあるなり。

熱情的なる大和民族は往々にして運命に弄せられ、泣きては笑ひ、喜びては悲しみ、受動的に運命の支配を受けて激發するも、活動的に毅然不屈外來の運命に反抗し、之と健鬪し以て此の强敵を壓倒せん事を知らず。順境に處しては天神幸を我に降すと謝するも、一度逆境に陷らば、曲神の災厄終に免るべからずと觀じ了らんとす。喜悲轉顚、順逆轉化の間に安立する所なく、隨つて豫言的の大希望を抱きて浮世の波濤に對抗せんとせず、目前の禍福に目眩し、心激し、爲に高大永遠彼岸の光明を望んで勇進猛往するの氣象な

し。これ我が民族性格上の一大缺點に非ずや。此の性格のために我が國家が幾何の進運を害し、幾何の强度を損するかを思はば、國を憂ふる者の一日も默視する能はざるところなり。（復活の曙光）

二　會津落城　その一

柴　四郎

散士は亡國の遺臣。彈雨砲煙の間に起臥し、生を孤城重圍の中に偷み、國破れ、家壞れ、窮厄萬狀辛酸を嘗め盡せり。屈指回顧すれば二十年前、我が國歐米各邦と開港條約を締盟せしに當つてや、尊王攘夷の說紛として起り、慷慨悲歌の士、幕府の專橫を憤り、俗吏の偷安を慨し、一死邦に報いむと、臂

井伊大老　名は直弼。
安藤侯　名は信正。
秦檜　支那南宋の奸臣。
韓・岳　韓世忠と岳飛との二人、共に南宋の忠臣。

を揮ひて呼號す。恨を幕府に抱くの士亂を好んで無爲に苦しむの徒、機に乘じて良民を煽動し、公卿を誘惑し、內に深謀遠慮なく、外は宇內の大勢を知らず、徒に螳螂の斧を以て歐米の兵を攘はむと擬す。或は深夜外館を襲ひ、火を放つて剽掠し、或は白日路上不意に起つて無辜の外客を枉殺し、以て匹夫の勇に誇り、以て神州の恥を雪むとなす。兒戲輕佻、怯弱殘暴、言ふに忍びざるものあり。井伊大老は前に斃れ、安藤侯は後に傷き、開港を唱ふる者は人目するに秦檜を以てし、鎖港を云ふ者は自ら韓・岳に比す。是に於て外人憤怒し、兵威を以て劫制し、我が海岸に寇し、我が藩籬を亂し、我が國權は彼の殺ぐ所となり、我が威力は彼の淩ぐ所となり、

神州の危殆、命脈の絶えざる一線の千鈞を懸くるが如く、外人の跋扈跳梁、殆ど復制す可からざるに至れり。而して其の原を尋ぬれば、幕府の失體より起れりと雖も、當時慷慨自ら任ぜし士人の、躬親ら招く所のもの亦多きに居る。

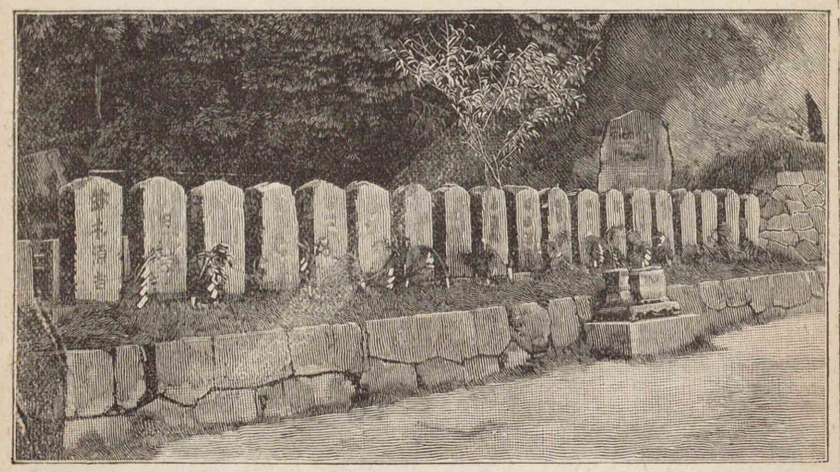
當時我*が主君京師を護衛し、*先帝の殊遇を蒙り、佐*久閒象山・横*井小楠諸名士の言を納れ、上、攘夷の非計を諫め、下、狂暴の輕擧を戒む。然るに內は朝臣等の攘夷論者に黨するあり、外は各國兵威を恃んで約を責むること秋霜よりも嚴なり。而して幕府は三百年昌平の後を受け、政、苟且に流れ、兵勢振はず、財政亂れ、大勢已に去り、復挽回すべからざるに至れり。この國家存亡の秋にあたり豈、毀譽・成敗を顧みるに遑あらむや。故に我が公決然京師を以て墳墓の地と定め、上は公武の軋轢を調和し、下は內亂の禍機を撲滅せむとし、奮つて之に當るも臂弱くして、負荷の重きに堪へず。且、州人勇あれども謀寡く、剛直にして變通に暗く、孤忠公武の閒に介立し、事違ひ、志空しく、徒に天下の憫笑する所となる、聞くに勝ふ可けむや。

偶〻先帝崩御し、*大樹亦繼いで薨ず。將軍慶喜公、英才を以て國步の艱難に當り、侯伯と舊怨を解き、弊政を除き、國權を復し、以て大いに爲す所あらむと欲す。然れども病膏肓に入り、復之を如何ともする能はず。遂に大政を奉還せられ、尋で我が公亦職を失ひ、京師を退くに至れり。而して當時世

我が主君　會津藩主松平容保。
先帝　孝明天皇。
佐久閒象山　名は啓。信州松代の藩士。
横井小楠　名は存。肥後熊本の藩士。
大樹　十四代將軍家茂。

人卻つて我を責むるに覇府を保庇して、維新の帝業を妨ぐるを以てし、朝廷我を罪するに禍心を包藏して帝命に抗するを以てす。　哀願途絶え愁訴計究り、錦旗東征、大軍我が境を壓す。

時に一二兇奸の輩あり、我が家財を掠め、我が婦女を殘し、降人を屠戮して、殆ど王師民を弔するの意を失ふが如し。　是に於て我が君臣皆以爲らく、これ一二雄藩の、陽に幼主を擁して、陰に私怨を報ずるのみと。　闔國捍禦、春より秋に至る。孤軍百戰、刀折れ、矢盡き、敵兵遂に城下に迫る。　我が將士枕藉死するもの麻の如く、瘡者空拳を揮つて敵兵に抗し、手斷ち、足碎けて地に斃るれども、目を瞋らし、齒を切して敵兵の



白虎隊の墓

進路を遮り、頭足處を異にし、血流れて杵を漂はすに至るも、猶敵に抗するの狀を爲さざるものなし。

當時年少の一隊あり、白虎隊と云ふ。　年約十六七、皆良家の子弟なり。　此の日初めて陣に臨み、驕勝の兵と戰ひ、衆寡敵せず、死傷略〻盡く。　餘す所僅かに十六人、奔つて一丘に上り、瘡を裹み、血を歃つて

憩ふ。少焉ありて城市、火四に起り、砲丸櫓樓を焚く。皆以爲らく、城陷り大事去れりと。乃ち西向再拜して曰く、「今や刀折れ、弦絶し、臣等が事終る。苟も生を偷んで以て君に背かず。」と、相訣別し、刃を引いて自殺す。眞に憐む可きなり。然れども大丈夫尸を馬革に裹むは伏波*の壯語、亦壯士の常のみ、何ぞ之を嗟かむや。唯酸鼻心を刺し、目見るに忍びず、耳聞くに堪へざるものは、婦女の操烈、國家と共に亡ぶる者擧げて數ふ可からざりしことなり。今にして其の慘狀を懷へば、茫として夢の如く、恍として幻の若く、覺えず涙下るなり。

伏波　馬援の事。馬援は後漢の光武帝に仕へて伏波將軍となる。後漢書馬援傳に「男兒要當下死二于邊野一以二馬革一裹レ屍還葬上耳。何能臥二床上一在二兒女子手中一耶。」

三　會津落城　その二

其の年*八月二十二日、勝軍山*の敗報到る。士民呼んで曰く、「敵軍飛來城下に迫る」と。時に散士三兄一弟あり。慈母小弟を一僕に託し、涙を揮つて遠く去らしむ。けだし深意の存する有り。大兄は軍を監して越の後州に戰ひ、轉戰して城下に傷き、仲兄は野州に戰歿し、小兄は兵を督して境上に拒ぐ。家翁疲兵を勵まして郭門に戰つて傷き、叔父、亦客兵を督し、瘡痍を裹みて尙激戰す。曉雨濛々、日色光なく、砲聲轟々、叫聲大に震ふ。散士時になほ幼なり。一矢を敵に放つて死せむと欲し、跪いて家人に訣別し、覺えず顏色悽愴たり。慈母叱して曰く、「汝幼なりと雖も武門の子なり。能く

其の年　明治元年。

勝軍山　會津城の東七里に在りて、要害の地なり。

一敵將を斬りて潔く尸を戰場に暴し、家名を損すること勿れ。」と。散士奮つて蹶起す。家人送つて門に至る。祖母呼んで曰く、「努力せよ。」と。乃ち涙を掩ふ。嗚呼痛ましいかな、百年の恩情、永訣、言茲に盡きぬ。

家人神前に聚まり、香を燒きて祖先の靈に告げて曰く、「事已に此に至る、亦言ふべきなし。苟も餘生を亂離の間に偷まじ。潔く國家に殉じて死し、父兄をして後顧の累を絶たしめ、以て三百年來養成せし士風を表明する、眞に此の時に存す。唯恨むらくは、我が公多年の孤忠、空しく水泡に屬し、反賊の臭名を負ふを。是終天の憾、海枯れ、山覆るも消し難し。」と。妹、時に五歲なり。慈母謂つて曰く、「敵兵已に我が家に迫る。今汝と泉下に赴き、以て、父兄を待たむとす。聞く、地下途暗しと、今我が一族皆亡ぶ、人の又香火を供するなし。汝相抱持して其の途に迷離する勿れ。」と。火を放つて從容義に就けり。噫、悲しいかな。

かくて孤軍益〻重圍の中に陷り、硝焰空を覆うて日光なく、風雪膚を刺して糧餉已に盡き、士卒日に傷亡して外に援兵なく、孤城を以て天下の大軍に抗する三旬、遂に降旗を建つ。

この役や、婦女の竊かに軍に從ひ死傷するもの多し。一婦あり、其の良人、父兄と皆戰歿するを聞き、手づから老母と、一子とを刃し、辭世一首を詠じて曰く、

識るや人まもるにたへで家も身も

燒くやほのほの赤きこゝろを

と、火を放つて自殺す。一姫あり、一藩降ると聞き、憂憤指を嚙んで壁上に血書して曰く、

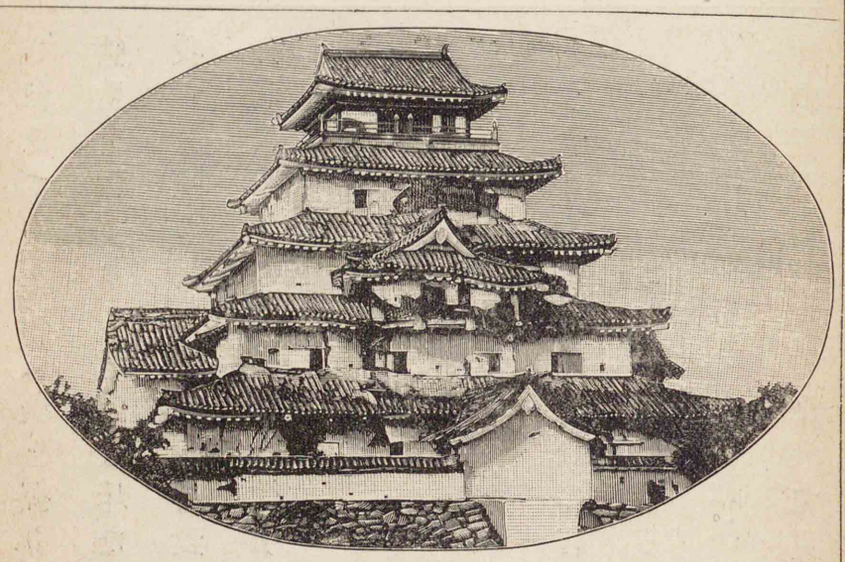
君王城上建降旗。妾在深宮何得知。

と、宮前の松樹に縊る。又一婦あり、月明に乘じ、笄を以て國歌を城中の白壁に刻して曰く、

明日よりは何處の人か眺むらむ
なれし大城にのこる月かげ

と、髪を薙つて死者の冥福を祈れり。士卒も憤恚自殺するものあり。

主將諭して曰く、「空しく死して名を滅せむよりは、恥を忍び、



鶴ヶ城天主閣

生を全うして、一旦外患あるの日誓つて神州の爲に生命を鋒鏑に委し、而して是非正邪を死後に定めむには若かず。」と。こゝに於て一藩恨を忍び涙を呑み、轅門に降る。

我が公は檻車、京に送られ、將士は東西に虜となり、幽囚數歲、俗吏に罵られ、獄卒に辱しめられ、後又極北の荒野に放謫せられ、悲風蕭殺、牧馬夜嘶

き、飢ゑて山下に蕨薇を掘り、窮して海濱に海藻を拾ひ、以て餘生を保てり。迍邅・竄斥、なほ悔いざる所以のものは、他日我が帝國の爲に、鞠躬命を致し、往年の志を天下・後世に伸べ死者に泉下に謝せむと欲するのみ。（佳人の奇遇）

宮内卿　後鳥羽天皇の官女。

能因法師　俗名橘永愷。諸兄十世の孫。

四　新古今集の歌

千五百番歌合に春の歌　宮内卿

うすくこき野邊の緑の若草に
あとまで見ゆる雪のむら消え

山里にまかりて詠み侍りける　能因法師

山里の春の夕ぐれ來て見れば
いりあひの鐘に花ぞ散りける

皇太后宮大夫俊成　姓は藤原。後白河院の勅を奉じて千載集を撰す。

藤原家隆　俊成の門人。後鳥羽上皇の勅を奉じて新古今集を撰す。

從四位頼政　源頼政の事。以仁王を奉じて平家討伐を企て敗れて平等院に自刃す。

百首歌奉りし時　皇太后宮大夫俊成

駒とめてなほ水かはむ山ぶきの
はなの露そふ井出の玉川

攝政太政大臣家百首歌合に春曙と

いふ心を詠み侍りける　藤原家隆

かすみたつ末の松山ほのぼのと
なみにはなるゝ横雲のそら

夏の月をよめる　從四位頼政

庭のおもはまだかわかぬに夕立の
空さりげなくすめる月かな

千五百番歌合に　正三位季能

小夜千鳥聲こそ近く鳴海潟
かたぶく月に汐や滿つらむ　僧正遍昭

題知らず

すゑの露もとの雫や世の中の
おくれさきだつためしなるらむ　藤原定家朝臣

攝政太政大臣家歌合に羇中晩風といふ

ことを詠める

いづくにか今宵はやどをかり衣
日も夕ぐれの嶺のあらしに　藤原高光

題知らず

正三位季能　姓は藤原。

僧正遍昭　俗名良峰宗貞。仁明天皇に仕ふ。

藤原定家　俊成の子。家隆等と共に後鳥羽上皇の勅によりて新古今集を撰す。

藤原高光　村上帝に仕ふ。

攝政太政大臣　藤原良經。後鳥羽天皇の建久二年攝政となる。

寂蓮法師　俗名藤原定長。俊成の甥。

鴨長明　京都鴨社の祠官の家に生る。後鳥羽上皇に召されて和歌所寄人となり、後隱遁す。方丈記の作者。

見てもまたまたもみまくのほしかりし
花のさかりは過ぎやしつらむ　攝政太政大臣

和歌所歌合關路秋風と言ふことを

人すまぬ不破の關屋の板びさし
あれにし後はたゞ秋の風　寂蓮法師

眺望のころゝを

和歌の浦を松の葉ごしに詠むれば
こずゑによするあまの釣舟　鴨長明

鴨の社の歌合とて人々詠み侍り

けるに月を

石川やせみの小河のきよければ
　月もながれを尋ねてぞすむ

五　歌人西行　その一

藤岡作太郎

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧。その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉・室町の世「抑〻歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり。」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず、近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書は尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名今に嘖々たるは、抑〻何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義淸、鎭守府將軍藤原秀鄕が九世の孫

山家集　西行の歌集。

なり。代々武を以て家を立て、義淸また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衞尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど、義淸は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衞門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に從ひて憲康を誘へるに、門のほとりに人立騷ぎ、内には泣悲しむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、「殿は昨夜頓死したまへり。」として、若き妻、老いたる母の、重り伏して歎くに、義淸は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、「棄恩入

鳥羽殿　京都の南方鳥羽村にありし御殿。白河天皇山莊として作り給ひ、後に鳥羽上皇の仙洞御所となる。

無爲」は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びて、とりすがれるを思ひ切りて緣より下に蹴落し、これこそ愛著の絆を斷つはじめぞと、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髪せりと。かくて名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

保延六年　崇德天皇の御代。(一八〇〇)

西行既に世を遁れ高野に籠り、吉野に隱れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右幕下に見參し、進みて奧州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。」と。一蓋の笠、一條の杖、草の枕、苔の茵、東

右幕下　右近衞大將源頼朝。

大師　弘法大師。

西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺之を惡み、弟子に告げて曰く、「遁世の身ならば、一筋に佛道修行の外、他事あるべからず。數寄を立てて、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。」と。その後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す者。」といふ。文覺、手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて明障子を開けて出づ。暫しまもりて、「年頃承り及びたるに、御尋悅び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子たちはいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸

高尾　山城國高尾山神護寺。文覺は當時神護寺の住持たり。

り去りしかば、「日頃の仰に違ひたるは。」と怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面様か、文覺をこそ打たんずるものなれ。」といへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、

願はくは花のもとにて春死なん
そのきさらぎの望月のころ

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、建久元年二月十六日七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの卽ち山家集なり。

建久元年　後鳥羽天皇の御代。（一八五〇）

宗祇　足利時代の連歌の名人。
應仁　足利將軍義政の時。（一三二七―一三八）
元祿　德川五代將軍綱吉の時。（一三四八―一三六三）

六　歌人西行　その二

藤岡作太郎

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅かに三人西行・宗祇・芭蕉これなり。

西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、おの〳〵、その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅

行がいかに詩人の吟嚢を肥すものなるかを知るべし。

そも〳〵平安朝の貴紳・淑女は、鴨・桂二川の流域數里の閒を己が世界とし、海も見ぬ天地に跼蹐して、足、畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、從うて思想の發展もある事なし。見聞するところは東山の花、西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外は知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花・言葉を飾るのみにて、累代繼承しゆけば、和歌の思想・辭句の上にも、おのづから典型を生じて天眞を忘る。實情を欺き、虛僞に流れ、浮華輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦嚢、その內容は空しく、滔々として風を成せ

崇德院
保元の亂の結果、讃岐に遷され給ふ。

る時、西行ひとり蹶起して、從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の閒に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところ萬朶の花と咲けり。平安朝の末、*崇德院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜることの、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふところ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後なほ名聲赫々として天成の大才と許さるゝこと、また宜ならずや。西行既に古來の典型を捨てゝ直ちに自然の堂奧に入らんとす。深く山川・草木を愛して之を視ることなほ己を視るが如く、同情の念に堪へざるは固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなり
　いまいくたびか春にあふべき
こゝにまた我が住みうくてうかれなば
　松はひとりにならむとすらむ

同情は進んで愛著となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世閒を捨てたり。されどゆかしき花よ、月よ。

おのづから花なき年の春もあらば
　何につけてか日を送らまし
うちつけにまた來む秋の今宵まで
　月ゆゑをしくなる命かな

愛著は迷なり、この雲を去らざれば眞如の月は明かなり難しと雖も、山水もと無心にして、人閒の如き魔性を有せず、これを以て窓前日夜の友とす、淸淡虛無一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に從うて轉ずること水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境も去つて安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るゝ花もあらじ
　安く待ちつゝ今日もくらさむ
雲にたゞ今宵の月をまかせてむ
　厭ふとてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てゝ成すものにあらずして、自ら成れるなり。

そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども
月を友にてあかすころかな

今よりは昔がたりは心せむ
怪しきまでに袖しをれけり

要するに西行は生れながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟吹來つて松濤卽ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易・率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦强し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歲の下愈〻光を增して、後人をして渴仰止まざらしむるなり。（國文學全史）

七　子を法師になして

吉田兼好

ある者、子を法師になして、「學問して、因果の理をも知り、說經などして世渡るたづきともせよ。」といひければ、敎のまゝに說經師にならん爲にまづ馬に乘習ひけり。輿・車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなむは、心うかるべしと思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらむに、法師の無下に能なきは檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。二つの業、やう〳〵さかひに入りければ、いよ〳〵能くしたく覺えて、嗜みけるほどに、說經習ふべき隙なくて年よりにけり。

此の法師のみにもあらず。世間の人、なべて此の事あり。若きほどは、諸事につけて、身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせむと、行末久しくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひて、打怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて、月日を送れば、ことごとに成す事なくして、身は老いぬ。つひに物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども、取りかへさるゝ齢ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へ行く。されば一生のうちむねとあらまほしからむ事の中に、いづれかまさると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、其の外は思ひ捨てゝ、一事を勵むべし。一日の中、一時のうちにも、あまたのことの來らむ中に、少しも、益のまさらむ事を營みて、其の外をば打捨てゝ、大事をいそぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てゝ十の石に就く事はやすし。十を捨てゝ十一に就く事は難し。一つなりとも優らむ方へこそ就くべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多くまさらぬ石には換へにくし。此をも捨てず、かれをも取らむと思ふ心に、彼をも得ずこれをも失ふべき道なり。

京に住む人、いそぎて、東山に用ありて、すでに行きつきたり

とも、西山に行きて、其の益まさるべき事を思ひ得たらば、門より還りて西山へ行くべきなり。こゝまで來著きぬれば、此の事をばまづいひてむ。日をさゝぬ事なれば、西山の事は、歸りて又こそ思ひたゝめと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。之を恐るべし。

一事をかならず成さむと思はば、他の事の破るゝをもいたむべからず、人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずして、は、一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、ある者、「ますほのすゝき、まそほのすゝきなどいふことあり。渡の邊の聖、この事を傳へ知りたり。」と語りけるを、登蓮法師、其の座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある。

渡の邊の聖　攝津の國渡邊（今の大阪の地）に住める僧なるべし。名不詳。

登蓮法師　歌に巧なる僧にて勅撰中に此の人の歌多く載せらる。

かし給へ。彼の薄の事ならひに、渡の邊の聖のがり尋ねまからむ。」といひけるを、「餘りにものさわがし。雨やみてこそ。」と人のいひければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨の晴間をも待つものかは。我も死に聖も失せなば、尋ね聞きてむや。」とて、走り出でてゆきつゝ習ひ侍りにけりと、申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたうおぼゆれ。「敏きときは則ち功あり。」とぞ、論語といふ書にも侍るなる。此のすゝきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因緣をぞ思ふべかりける。（徒然草）

敏き時は云々　論語陽貨篇に、「恭則不レ侮、寛則得レ衆、信則人任焉。敏則有レ功、惠則足二以使一レ人。」

八　弟に與へて天理を諭す

釋　澤　庵

御手前萬事御才覺肝要に候。先書に何事も天道次第との御文尤もに候。其の分なる儀も候へ共、唯天道より金銀米錢をあたへたる事はなく候、人の才覺にて候。例へば一石の米を片端食ひはてゝ、其の時天道より借銀借米有るまじく候。何事も人間の業と御心得可有候。天道は、此方次第のものにて候。世上申す天道は、杳かに違ひ申候。古今に蓮の葉は丸く松の葉は細く候。其の如く我が身に應ずる天道を、よくわきまへ、少年の者は引退りて華麗をせず、大名はそれ程に身を持つ所、則ち天道に任すると申候。百石取る身にて、二百石とる人の體、天道に背く。身に不似合の振舞をする人は、一生貧乏神の責物にて候。鵜の眞似する烏は水に溺れて死する天道の罰にて候。鵜は鵜、鴉は鴉の働、天道の本理にて候。箇樣なる謂を知らずして、天道とばかり人毎にいうて、寢てゐても天道より食を被與候樣に思ふ事、大なる誤に候。人は品々に世を渡る天道にて候。然るに細工人も定規なくてはならざるものにて候。人は人を定規にするが能く候。但し我が心の樣なる人を定規にせば、三五の十八にて候。分限を我と越えずして、身を持つ分別、能く摺切れぬ人と申す事にて候。貴殿のは御分限より振廻し、手廣く見え申候。是は天道に御背き候閒、つまり惡く候、半分笑止に候。我等申す事違ひ申すまじく候。冬は寒きものにて候、若しあたゝかなれば、明年涼しからず、夏暑

からざれば、秋萬事あしく候。物事に位の正しき處が天道にて候。大小ともに身の分限に應じて、十人抱へて可然候はば、七八人の心持にて後悔少く候。月を御覽可有候。十五夜は圓滿に候へば一分づゝかけ申候。これ人閒の見せしめなり。

思へたゞ滿つればやがて缺く月の
十六夜の空や人の世の中

此の歌至極の理に候。長文のてい、むづかしく候へども、兄弟に生れあひ、御爲よく候へかしと如是に候。何卒ふうを御かへ候うて、借金のなきやうに御分別專一に候。親類に遠ざかり親しき知音に恨を結ぶも、多分貧乏にて候。

Brutus　　Caesar

心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神や守らん

皆是にて候。尙期後音之時候。恐惶

九　柩前の演說

諸君よ、羅馬人諸君よ。親友よ、國人諸君よ。暫く御靜聽を煩はしたい。自分が此處へ參つたのは、*シーザーの葬儀を行はんが爲で、彼を稱讚せんが爲ではない。人の行つた惡事は其の死後までも殘るが、善事は往々にして其の骨と共に埋沒します。シーザーの如きもまた然うあらしめたはうがよろしい。*ブルータスは、シーザーは野心を抱いたと

申された。果して然らば、それは甚だ痛ましい過失であつて、シーザーは甚だ痛ましい應報を蒙つたのである。こゝにブルータスをはじめ其の他の人々の許可を得て――蓋しブルータスは公明正大の人であり、又其の他の人々も悉く公明正大の人々でありますから――許可を得て、こゝにシーザーを葬るの辭を演べるのであります。彼は自分の親友であつた、自分に對しては忠實な、公平な友であつた。が、ブルータスは、彼は野心を抱いてゐたと言はれる、而してブルータスは、公明正大の人である。シーザーは嘗て夥多の捕虜を羅馬へ伴なひ還つた、其の償金は悉く國庫に收められた。此のシーザーの行爲が野心家らしく見えました

らうか。嘗て貧民が飢餓に叫ぶのを聞いてシーザーは涕を流した。野心は今少し峻酷な素質の者でなければならん。けれども、ブルータスは、彼は野心を抱いたと言はれる、而してブルータスは公明正大の人である。諸君は何れも御覽になつたであらう、リユーパアカルの祭日に於て、自分は三度まで王冠をシーザーに呈した、それを彼は三度迄辭した。あれが野心でありませうか。けれどもブルータスは野心を抱いたと言はれる、而して確かにブルータスは公明正大の人である。自分は決してブルータスの言つたことを駁撃しようとするのではない、唯知つてゐる限りの事實を申すのである。諸君は何れも嘗てシーザーを愛して

をられた。それには理由が無かつた譯ではない。然らば、如何なる理由で諸君は彼を哀悼することを差控へられまする。おゝ判斷力。理非を判ずる分別力は、今は獸類などの有に歸して、人間は理性を失つてしまつたのか。御免下さい。予の精神はシーザーと一緒に此の柩の中に入つてしまつてゐる。それが戻つて來る迄は物が言はれません。つひ昨日まではシーザーの一言は全世界に匹敵することも出來たのであつた。今や彼は此處に横たはり、如何なる卑しき匹夫と雖も、彼に尊敬の意を致さうとはしない。お諸君よ、若し自分がかりにも諸君を煽動して憤激せしめ、反抗の念を起さしめるやうであると、是取りも直さずブルー

ータスを傷け、カシヤス*を傷くることゝなるが、あの人達は、諸君御存じの通り、公明正大の人々である。自分は彼の人人を傷くることを欲しない。自分はあのやうな公明正大な人々を傷くるよりは、寧ろ世に亡き者を傷け、自分を傷け、諸君を傷けた方が當然と思ふ。併しながら此處にシーザーの捺印を經た一葉の書面がある。自分は之をシーザーの納戸内に於て發見しました、すなはち彼の遺言狀である。若し平民諸君をして、唯一寸此の遺言狀の主旨を聽かしめたならば――御免なさい、無論自分は讀みはしないが――若し聽かしめたならば、諸君はシーザーの死骸に驅寄つて其の傷口に接吻し、其の神聖な鮮血に各自の手巾を浸すど

ころでなく、其の頭髪一筋をも後の記念にと爭ひ求めて、其の身死なんとする閒際には遺言中にそれを記入し、永く子孫に讓り傳ふべき寶物ともせらるゝであらう。

まあ〳〵、お鎭りなさい。遺言狀を讀んではなりません。

シーザーが深く諸君を愛してゐた事を諸君が知らるゝのは宜しくない。諸君は木でも石でもなく、人閒である。既に人閒である以上は、シーザーの遺言狀を聽かれたならば、必ずや深く感激して狂者の如くにもならるゝであらう。

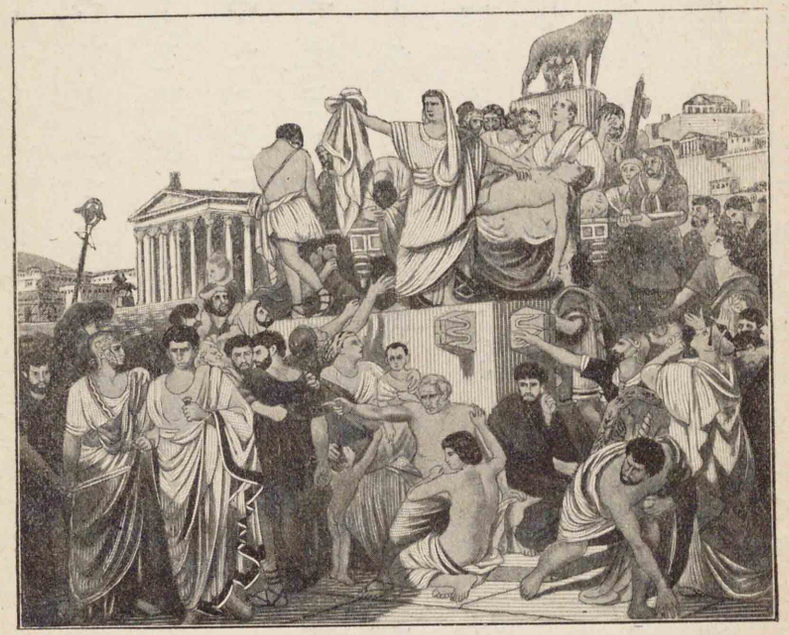
諸君はシーザーの財産の相續人ぢやなどといふ事は知られんがよろしい。若しそれを知られたなら、おゝ！どんな事になるやら圖られない。

しばらく、しばらく待つて下さい。あゝ、つひうつかり口走つてしまつた。公明正大の目的の爲に短劍を以てシーザーを刺殺した人達を傷くることにならねばよいが、あゝ、困つたことになつた。

では、どうしても遺言狀を讀めと言はれますか？　では、シーザーの遺骸の周圍へ環形におなんなさい、遺言狀を製した當人を諸君に見せませう……壇を降りませうか！　下りてもよろしいんですか？

これ、さう押してはいかん。ずつと離れて下さい。諸君に若し涙があるなら、今こそながす準備をなさい。諸君はいづれも此の外套を御存じであらう。私はシーザーがはじ

Casca　　Nervii



アントニーの演說

めて之を著用した日を覺えてゐる。

それは或夏の夕方、勁敵ネルワイイ族を征伐して大勝利を得た其の日に陣中で被たのであつた。御覽なさい、これ此處をカシヤスの短劍が刺貫いたのだ。御覽なさい、奸賊カスカめがどん

なに斫つたか！此處をば子のやうに愛せられてゐたブルータスが突通したのだ。すなはち彼が其の惡むべき刄を拔取つた其の途端に、御覽なさい、シーザーの鮮血が其の後を追つて、さながら人が戸口から走り出るやうに流れ出たのを。今無慚な叩き方をしたのは、よもやブルータスではあるまいがと、見定めんとしたかのやうに。何故なれば、ブルータスは諸君も御存じの通り、シーザーの守神同樣であつたからです。如何に深くシーザーが彼を愛してゐたかは、おゝ神々よ、あなたがたが御承知のことだ……これこそ最も殘忍無慈悲な切口であつたのだ。流石の大シーザーもブルータスが自己を刺すを見ては、謀反人の力よりも遙

Pompey

かにおそろしい彼が恩知らずの振舞を見ては、流石の大勇氣も打ちくぢかれ、おのが外套で面を掩うてポンペイ*の像の脚下にすらも、大シーザーは倒れたのだ、血汐は泉とながるゝ間に。

おゝ！國人よ、同胞よ。シーザーが倒れたのは國が倒れたのも同樣です。それと同時に自分も、諸君も、吾々ことごとくが倒れたのだ。而して殘忍無慚の叛逆人等は倒れた吾々を眼下に見下して凱歌を奏し勝誇つた。おゝ！今こそ諸君は泣く。して見るとさすがに惻隱の感に堪へられんと見える。あゝ其の涙こそは恩を知り義を知る涙だ。やあ、諸君。これは只シーザーの外套に傷が附いたに過ぎない。然るに諸君は之を見てさへもお泣きなさるか？さ、これを御覽なさい。これが本人です。これ此のとほり謀反人どもに切りさいなまれた本人です。お待ちなさい、お待ちなさい。

深切なる諸君、親友諸君よ。自分の申したことが原因となつて、諸君が然う妄りに唐突に暴擧に及ばれるやうなことがあつてはなりません。此の度の事を行つた人達は何れも公明正大な人々であります。如何なる私怨・私憤があつて、嗚呼！かやうな事を敢てせられたか、それは自分の知る所でない。ともかくも彼等は賢明でもあり、また公明正大でもあるから、無論諸君に對して道理らしい辯解をせらる

るであらう。親友諸君よ、自分は諸君の心を盜まうとして來たのではない。自分はブルータスのやうな雄辯家でない。否諸君の豫て御存じの通りの質撲な、木訥な、只友を愛するだけの男である。それをまた彼等が知つてをればこそシーザーの爲に公に演說することをも許したのである。無論自分は才智もなければ文字もなく、德もなく、身振・手眞似も下手なれば表白法も知らず、辯舌も拙く、迚も人の血を攪亂するやうな力は無い。私は只眞直に辯じ得るのみである。

諸君の知つてをらるゝ事實其の儘を諸君に話して、懷かしいシーザーの傷口を、哀な無慚な、物を言ひ得ない口を諸君

に見せて、私が其の口に代つて語つたまでである。が若し私がブルータスでブルータスが私であつたならば、必ずや諸君の心を攪亂して、羅馬街頭の石をすらも奮起せしめ、忽ち暴動を起さすやうな雄辯を、シーザーの一つ〳〵の傷口から發せしめたでもあらうものを。

市民甲「暴動を起さう。」

市民乙「ブルータスの家を燒いてくれう。」

市民丙「ぢやあ出掛けろ——さあ〳〵徒黨の奴等を搜し出せ。」

まあお聽きなさい、諸君。まあ、私の言ふことをお聽きなさい。

君がたは理由をよう承知しないで事をしようとしてをら

れる。シーザーは何故にそれほどまでに諸君に愛慕せられるべきであるか、御存じか？あゝ諸君は御存じない。然らばそれを改めてお話しせねばならん。諸君は先刻申した遺言狀の事をお忘れなすつたのだ。

これがシーザーの捺印を經た遺言狀です。シーザーは羅馬市民各自へ、一人々々へ、七十五*ドラクマを與へまする。

靜かにして聽いて下さい。

尙其の上に彼は自分の遊歩地を悉く諸君に讓りました。即ち彼の私有に屬する各處の凉亭をはじめ、近頃新に樹木を植附けさせた*タイバア河の此方、岸の各處の庭園をば諸君及び諸君の子孫に、永久に讓り渡して、諸君をして其處で

Tiber

Drachma

古代のギリシャの銀貨の名。州と時とにより て其の價を異にす。

享樂せしめ自由に逍遙せしめ、疲勞を慰めしめんことを望んでゐる。シーザーは斯ういふ人であつた。何時又斯くの如き人が來るであらうか？

市民甲「もう決して來ん、もう決して——さあ〳〵齋場へ往つて遺骸を火葬にして、それから其の燃えさしを炬にして謀反人共の家を燒かう。死骸を持上げろ、死體を。」

市民乙「さ、火を取つて來い、火を。」

市民丙「腰掛をぶつ倒せ。」

市民丁「長床几をぶつ倒せ、窓を毀せ、何もかも叩き毀せ。」

死體を携へて市民等皆入る。（坪内逍遙譯「シーザー」）

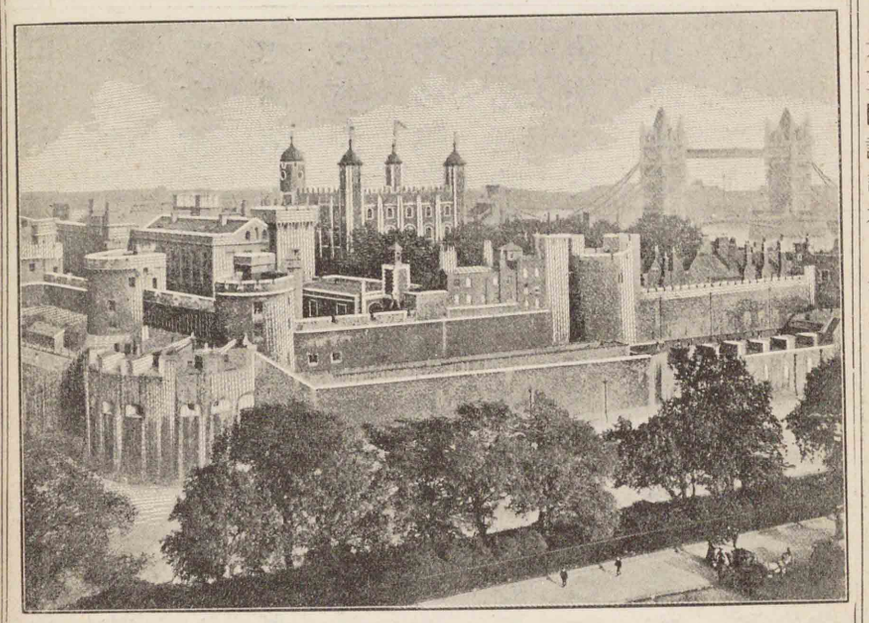
一〇　倫敦塔

夏目漱石

「來るに來所なく、去るに去所を知らず。」といふと禪語めくが、余はどの路を通つて塔に着したか、又如何なる町を横ぎつて吾が家に歸つたか、未だに判然しない、どう考へても思ひ出せぬ。唯塔を見物しただけは慥かである。塔其の物の光景は今でもあり〳〵と眼に浮べる事が出來る。前はと問はれると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。唯前を失し後を失したる中間が會釋もなく明るい。恰も闇を裂く稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の燒點の様だ。倫敦塔の歴史は英國の歴史を煎じ詰めたものである。過去といふ怪しき物を蔽へる

戸帳が自づと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するのは倫敦塔である。凡てを葬る時の流が逆しまに戻つて、古代の一片が現代に漂ひ來れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して、馬車・汽車の中に取殘されたるは倫敦塔である。

此の倫敦塔を塔橋の上からテームス*河を隔てて眼の前に望んだ時、余は今の人か、將、古の人かと思ふまで我を忘れて餘念もなく眺め入つた。冬の初とはいひながら物靜かな日である。空は灰汁桶を搔き交ぜた様な色をして、低く塔の上に垂れ懸つて居る。壁土を溶し込んだ様に見ゆるテームスの流は、波も立てず音もせず、無理やりに動いて居る



倫敦塔

かと思はれる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆を操るのだから、不規則な三角形の白い翼が、何時までも同じ所に停つて居る樣である。傳馬の大きいのが二艘上つて來る。唯一人の船頭が艫に立つて艪を漕ぐ。是も殆ど動かない。塔橋の欄

干のあたりには白き影がちら〳〵する、大方鷗であらう。見渡した處凡ての物が靜かである、物憂げに見える、眠つて居る、皆過去の感じである。さうして其の中に冷然と二十世紀を輕蔑する樣に立つて居るのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、苟も歷史の有らん限りは我のみは斯くあるべしと云はぬばかりに立つて居る。其の偉大なるには今更の樣に驚かれた。

此の建築を俗に塔と稱へて居るが、塔といふは單に名前のみで、實は幾多の櫓から成立つ大きな地域である。ならび聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるもの色々の形狀はあるが、何れも陰氣な灰色をして、前世紀の記念を永劫に傳へん

と誓へるが如く見える。

余はまだ眺めて居る。*セピア色の水分を以て飽和したる空氣の中にぼんやり立つて眺めて居る。二十世紀の倫敦が吾が心の裏から次第に消え去ると同時に、眼前の塔影が幻の如き過去の歴史を吾が腦裏に描き出して來る。朝起きて啜る澁茶に立つ湯氣の、寢足らぬ夢の尾を曳く樣に感ぜられる。暫くすると向岸から長い手を出して余を引張るかと怪しまれて來た。今まで停立して身動もしなかつた余は、急に川を渡つて塔に行き度くなつた。長い手はなほ强く余を引く。余は忽ち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐい〳〵引く。塔橋を渡つてからは、一目散に塔門まで馳せつけた。見る閒に三萬坪に餘る過去の一大磁石は、現世に浮遊する此の小鐵屑を吸收して了つた。（漾虛集）

Sepia

一一　漂泊

伊良子清白

蓆戸に秋風吹いて
河ぞひの旅籠屋さびし
あはれなる旅の男は
夕ぐれの空を眺めて
いと低く歌ひはじめぬ
亡き母はをとめとなりて

白き額月にあらはれ
亡き父はをぐなとなりて
まろき肩銀河を渡る

柳洩る夜の河白く
河こえて煙の小野に
かすかなる笛の音ありて
旅人の胸に觸れたり

故郷の谷間の歌は
續きつゝ斷えつゝ悲し

大空のこだまの音と
地の底のうめきの聲と
まじはりて調べは深し

旅人に母はやどりぬ
若人に父はくだれり
小野の笛煙のをちに
かすかなる節は殘れり

旅人は謠ひつづけぬ
みどり子の昔にかへり

ほゝゑみてうたひつゝあり　（孔雀船）

一二　光頼參内

十二月十九日
平治元年。（一一五九）

内裏には、*十二月十九日、公卿僉議とて催されたり。　勸修寺左衛門督光頼卿、このほどは、「*信頼卿の擧動過分なり。」とて、不參におはしましけるが、「參内して、承らむ。」とて、ことに、あざやかに、束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀を、おとなしやかに佩き給ひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雜色の裝束に出立たせ、「自然の事もあらば、人手に懸くな。　汝が手に懸けて、光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、その外、清げなる雜色、四五人召具して、大軍、陣を張りて處々を固め、守護しける

勸修寺左衛門督光頼
藤原氏。時に年三十六。

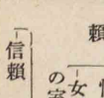
信頼
藤原忠隆の子にして光頼の甥に當る。時に、年二十七。

を事ともせず、前、高らかに追はせて、入り給へば、兵共も、大いに恐れ奉り弓をひらめ矢をそばめて通し奉る。

紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上薦達みな、下にぞ著かれたる。　光頼卿こは不思議の事かな。　人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものをと思はれければ、*左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ餘りにしどけなう見え候へ。」と色代して、しづしづと歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。　光頼卿は信頼卿のためには、*母方の舅なる上、大力の剛の人なれば、特に畏れて見えられけり。　右の袖に居懸けられて、伏目になり

長方
藤原氏。時に年二十。

母方の舅云云



て、色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿、下重の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督*が一座すと見えて候ふ。召に參ぜざらむ者をば、死罪に行はるべしと承りて參内する所なり。抑〻何事の御諚ぞ。」と問はれけれども、信頼卿物も宣はず。著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て、つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。

庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より、多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人、一人もおはしまさざ

衛府督　右衛門督信頼を指す。

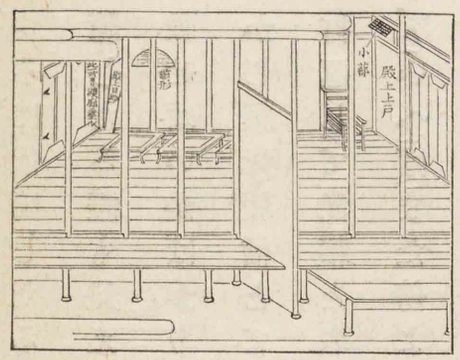
りつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いさゝか も臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりかたのもしからむ。」と申せば傍なる者、「むかし頼光*・頼信*とて、源氏の名將おはしましき。その頼光を打返して、光頼と名告り給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より、「なぞ、その頼信を打返して、信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれほどの臆病におはします。」といへば、「壁に耳、天に口といふことあり、おそろし、おそろし。聞かじ。」といひながら、みな忍び笑に笑ひけり。

光頼卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板、高らかに踏鳴して立たれたりけるが、

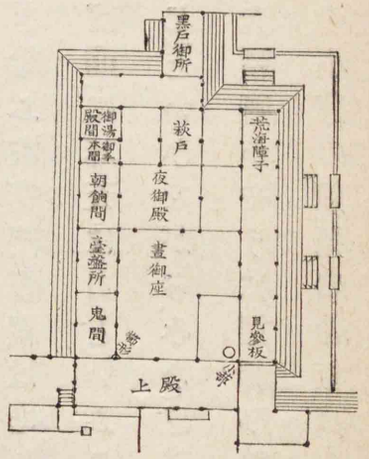
頼光　源満仲の長子。圓融・華山・一條・三條・後一條の五朝に歴仕す。

頼信　頼光の弟。一條・三條・後一條・後朱雀の四朝に歴仕す。

別當惟方　檢非違使別當たり。時に、年三十五。



殿の上の間



清涼殿平面圖

荒海の障子の北、萩の戸の邊に弟の別*當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人みな當時の有職、然るべき人共なり。その内に入らむこと、甚だ面目なるべし。さても、先日、右衞門督が車の尻に乘りて、少納言入道が首實檢の爲に、神*樂岡へ向はれしことは如何。以ての外、然るべからざる擧動かな。近衞大將・檢非違使別當は、他にことなる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふこと、先蹤もいまだ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實驗は、甚だ穩便ならず。」とのたまへば、別當、「それは天氣にて候ひしかば。」とて、赤面せられけり。

少納言入道　藤原信西。

神樂岡　山城國愛宕郡。京都の西北郊外。

光頼卿、重ねて、「こは、如何に勅諚なればとて、いかで、存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖、勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君すでに十九代、臣また十一代。承り行ふ事は、みなこれ德政なり。一度も惡事に

勸修寺内大臣　藤原高藤。

三條右大臣　高藤の子定方。

英雄　英雄家の略。公卿の家格の名にして清華とも稱し、攝家に次ぐ。

熊野參詣　此の時清盛は宿願ありとて重盛と共に熊野參詣に立ちし其の途中にありき。

切目の宿より云々　切目は紀州日高郡にある村。此處に切目の王子と云ふ社あり。清盛は十二月四日出立、十日切目に宿して

從はず。當家はさせる英雄*にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なひて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどの事はなかりしに、御邊、始めて暴惡の臣にかたらはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野*參詣を遂げずして、切目*の宿より馳せ上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待受けて、大勢にてぞあんなる。信賴卿がかたらふ所、若干ならじ。平家の大勢、押寄せて攻めむには、時刻をや廻らすべき。もし、また、火などを懸けなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも、朝家の御歎なるべし。如何にいはむや君臣ともに、自然の事もあらば、天下の

六波羅の急報に接す。

主上　二條天皇。

上皇　後白河上皇。

珍事王道の滅亡この時にあるべし。右衞門督は、御邊に大小事を申し合すとこそ聞ゆれ。相構へて、相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはしますやうに思案せらるべし。さて主*上は何處におはしますぞ。「黑戸の御所に。」「上*皇は。」「一本御書所に。」「內侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜のおとどに。」と、左衞門督、次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また、「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには、右衞門督住み給へば、その方ざまの女房などぞ影ろひ候ふらむ。」と申されければ、光賴卿聞きもあへず、「世の中は、今はかくござんなれ。主上の渡らせ給ふべき朝餉には、信賴住み、君をば黑戸の御所に遷し

許由　支那の堯帝の時の人。堯の天下を讓らんとするを辭し俗事を聞き耳汚れたりとて之を潁水に洗ふ。

參らせたり。末代なれども、さすがに日月はいまだ地に墮ち給はぬものを、天照大神・正八幡宮は、王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國には、かやうの例ありといへども、わが朝にはいまだかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろ〳〵しげに憚る所なく口說き給へば、惟方は人もや聞くらむとすさまじげに立ちにけり。光賴卿、且は悲しくて、「われ如何なる宿業によりて、かゝる世にうまれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の內裏の有樣を聞かむ輩は、耳をも目をも、洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信賴の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出で給ひける。（平治物語）

中納言　平知盛。

女院　建禮門院德子。高倉天皇の中宮にして安德天皇の御母。

二位殿　淸盛の後室平時子。

一三　壇の浦　その一

さるほどに、源氏の兵ども、いとど力を得て、平家の船に漕寄せ漕寄せ亂れ乘る。遠きをば射、近きをば斬る。たて橫散散に攻む。水手・かんどり、櫓を棄て楫を捨てゝ、船を直すに及ばず、射伏せられ、切伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は女院・二位殿などの乘り給へる御船に參られたりければ、女房たち、「こはいかになり侍りぬるぞ。」と宣ひければ、「今はともかくも申すに言葉足らず。かねて思ひ設けたることなり。めづらしき東男どもをこそ御覽ずらめ。」とてう

ち笑ひ給ふ。　手づから船の掃除をして、見苦しきものども、海に取入れ、「こゝ拭へ、かしこ拂へ。」などのたまふ。「さほどの事になり侍るなるに、しづかなるたはぶれ言かな。」とて女房たち、聲々をめき叫び給ふ。

二位殿は今はかぎりと見はて給ひにければ、練色の二衣ひきまとひ、白袴のそば高く挾みて、*先帝を抱き奉り、帶にて、わが身を結びあはせ參らせ、寶劍を腰にさし、神璽を脇に挾みて、ふなばたに臨み給ふ。　先帝は八つにならせ給ひけり。御年のほどよりはねびとゝのほらせ給ひて、御形あてにうつくしく、御髮黑くふさやかにして、御背にかけ給へる御貌、たぐひなくぞ見えさせ給ひける。　御心迷ひたる御氣色に

先帝　安德天皇。

て「こはいづこへ行くべきぞ。」と仰せられけるこそ悲しけれ。二位殿は「兵どもが、御船に矢を參らせ候へば、別の御船へ行幸なし參らせ候。」とて、

いまぞ知るみもすそ河の流には
浪のしたにもみやこありとは

と宣ひもはてず、海に入り給ひければ、八條殿、同じくつづきて入りたまひにけり。　國母建禮門院をはじめ奉りて、先帝の御乳母帥典侍・大納言典侍以下の女房たち、船の艫・舳に臥しまろび聲をとゝのへて、叫び給ふもおびただし。　浮きや上らせ給ふとしばしは見奉りけれども、二位殿も、八條殿も、深く沈みて見え給はず。　昔は一天の主として、*殿をば、長生

殿をば長生云々　慶滋保胤が、天子萬年の詩に、「長生殿裏春秋富、不老門前日月長。」

と祝ひ、門をば、不老と名づけしかども、今は雲上の龍下りて忽ちに、海中の鱗となり給ふこそ悲しけれ。　あはれなるかな、花に喩へし、十善の御粧、無常の風に匂を失ひ悲しいかな、月に輝きし、萬乘の玉體、蒼海の浪に、影を沈めおはすこと。無常、もとより、さだめなし、有待、誰かはたのみあるなれども、清涼・紫宸の玉の臺を振捨てゝ、鬪戰・兵革の船中に行幸して、いまだ十歳にだにも滿じ給はぬ御齡に、忽ちに、波の底に入り給ひけむ、あはれといふもおろかなり。

女院は後れ奉らじと、御燒石と御硯の箱とを、左右の御袂にやどし入れ、御身を重くしてつづきて、海に入らせたまひけるを、渡邊源次兵衞番が子に源五馬允昵が郎等、熊手を下して、御髪をから卷きて御船に引入れ奉る。　彌生の末のことなれば、藤重の十二ひとへの御衣を召されたり。　翡翠の御髪よりはじめて、皆しほたれおはしますぞ御いたはしき。

昵は、もしやの時とて、鎧唐櫃の底にもたりける、唐綾の白小袖一襲取出して、女院に參らせたりけるは、夷なれどもなさけあり。　昵は近くは參り寄らず、程を隔て畏りて、「君は、女院にてわたらせおはするか。」と度々たづね申しければ、御覽じなれぬ夷のありさま、おそろしく思し召しけれども、御ことばをば出させ給はず、二度うちうなづかせ給ひけり。

一四　壇の浦　その二

- 忠盛
  - 清盛
    - 重盛
      - 維盛
      - 資盛
      - 清經
    - 宗盛
      - 清宗
    - 知盛
      - 知章
    - 重衡
    - 德子
    - 經盛
      - 經正
      - 敦盛
    - 敦盛
      - 通盛
      - 敦經
    - 賴盛
    - 忠度

源氏の郎等に、後藤三範綱は、平家の船に乗入りて、弓をば捨て、打物抜いて走り回りけるを、越中次郎盛嗣寄せあはせ、組んで重り、上になり下になり、船中を五ころび、六ころびしければ、互に刀を抜く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けむとて、悪七兵衛景清、範綱をば刺してけり。　前能登守教經は、元來心剛に身健かにして、進むことありて退くことなし。軍敗れぬと見えければ思ひ切り、死生知らず振舞ふ。　これぞ聞ゆる能登守とて、われ先に、われ先にと爭ひて、かゝりけれども、少しも、面も振らず戰ふ。　矢頃に廻る者をば、さしつめさしつめ射けるに、更にあだ矢なし。　近づくものをば引寄せ、提げて海へ投入れければ、面を向け難し。

九郎冠者　判官と云ふも同じ。義經の事、宮撿非違使の尉なりければ判官といふ。

太政入道　平清盛。

前新中納言知盛卿これを見て、「よしなき事し給ふものかな。このともがらは、皆歩兵（ヒヤウ）にこそ侍りぬれ、あながちに、目に立て給ふべきにあらず。　自害をもし給へかし。」と宣へば、さては、*九郎冠者に組めとこそ。　それは、存ずるところなり。いかがはせむと伺ひ回るところに、判官の船と、能登守の船とすりあはせて通りけり。　能登守、然るべしとて判官の船に乘移り、兜をば脱ぎすて、大童になり、鎧の袖、草摺ちぎり捨て、輕々と身をしたゝめて、いづれ九郎ならむと馳せめぐる。判官かねて存知して、とかく違つて組まじ、組まじと紛れ行く。　さすが大將軍と覺えて、鎧に小長刀突いて、武者一人あり。　能登守、目をかけて、「軍將義經と見るは僻目か。　故*太政

入道の弟、門脇中納言教盛の二男に能登守教經。」と名告り、にこと笑ひて飛びかゝる。判官は組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞやすらひける。大將軍を組ませじとて、郎等どもが立て隔て、立て隔てしけれども、「除け、やつばら。ものものし。」とて、海の中へ踏入れ取入れつと寄る。既に組まむとしければ、判官、早業、人にすぐれたり。小長刀を脇に挾み、さしくゝりたる、弓だけ二つばかりなる鄰の船へ、つと飛移り長刀取直して、船端ににこと笑ひて立ちたりけり。能登守は力なくして船に留り、「あゝ飛びたり、飛びたり。」とほむ。その後、能登守、今をかぎりと狂ひ回りければ面を向け難し。こゝに安藝太郎時家といふものあり。阿波國の住人安藝大領といふ者の子なり。三十人の力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく、三十人づゝ力あり。時家、二人の郎等にいひけるは、「吾等三人、心を一つにして組まむには、鬼神といへども負くまじ。能登殿強しといふとも、やは、三人には勝ち給ふべき。三人取つてあはすれば、九十人が力なり。私の力業は、人の證據に立たず。能登守に組んで、ちからをも、人に知らせ、剛の名をも極めむと思ふはいかに。」といへば、郎等ども、「仔細にや及ぶべき。」とて、三人一度に鍬を傾け打つてかゝる。能登守は、源氏の郎等に、名もあり、力もあればこそ、教經にはかゝるらめ。これぞ軍の最後なると思ひければ、しづ〳〵と相待つところに、三人鼻をならべ、隙間もなく

つと寄る。一人をば海中へたうと蹴入れ、二人をば左右の脇にかい挾んで、一しめしめて、「いざ、おのれら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」とて、海の底へぞ沈みける。前平中納言教盛、同新中納言知盛は、一所におはしけるが、伊賀平内左衞門を召されて、「いかに家長。見るべき事は見つ。先帝をはじめ參らせて、一門の人々自害し海に入りぬ。今までも、かくあればつれなき命を惜しむに似たり。大臣殿は、いかになり給ひぬるやらむ。」と問ひ給ふ。家長涙を流して、「大臣殿・右衞門督殿二人は、一度に海に入り給ひたりつるを、敵熊手にかけ奉りて、二所ながら引上げ、捕り參らせ候ひぬ。」と申しければ、知盛卿、「あな心う、など深くは沈み給はざりけるぞ。」と、二度のたまひて涙をはら〳〵と流して、「今は、何をか見聞くべき。家長、日ごろの約束はいかに。」と仰せられければ、「今さら、君に離れ奉りて、いづちへ行くべきに候はず。御伴なり。」と申せば、知盛卿、世にうれしげに思ひて平中納言教盛卿と、鎧脱捨てゝ、西にむかひ、念佛申して、兩人自害せられければ、有國・家長以下、侍八人、同じ枕に自害して伏しぬ。「あはれ、この人に世を譲りたらば、たとひ運のきはみなりとも、都にて、いかにもなり給ひなまし。」と惜しまぬものはなかりけり。

赤旗・赤符、海上に充ち滿ちて、紅葉を風に吹散したるが如し。海水も、血に變じて、渚々に寄する波、薄紅にぞ流れける。主

大臣殿　内大臣平宗盛。

右衞門督殿　宗盛の長子清宗。

を失へる船は、風に隨ひ、潮に引かれて、越路の雁の、行を亂るが如く、膚を離れたる衣は、水に浮き、波にあらそうて、*蜀江の錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓・金殿の昔の榮華、船中・浪底の今のありさま、思ひならべてあはれなり。（源平盛衰記）

蜀江の云々　白氏六帖に、「蜀成都有二濯錦之江一云云。」

一五　討入の光景を報ず　　榎本其角

*歳尾の御壽として例年の如く遠路の處酒料一封蕗の鹽漬一桶贈り下され、御厚志の程幾久しく受納致し候。御序に御家内始め御社中へも宜しく御傳へ下さるべく候。然れば去る十四日本所都*文公に於て年忘れの一興御催しあり、*嵐雪・杉風われらも一席にて、折から雪面白く降出し風情手に取るが如く、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を照し、風興今は捨て難くして、夜ただ更けゆき、最早丑三つ頃になり犬さへ吼えず打靜まり、文臺・料紙も押片寄せ、四五人集りて蒲團を被ぎ、夢の憂世といふ間もあらせず、劇しく門を叩く者兩人玄關に案内し、我等淺野家の浪人堀部彌兵衞・大高源五、今夕御鄰家吉良上野介屋敷へ押寄せ、亡君年來の遺恨を果さむため、大石内藏助始め四十七人、唯今吉良殿を討取り候間御鄰家の御好み、武士のなさけ、萬一御加勢も候はゞ末代の御不覺と存奉候。願はくは門戸を嚴しく御防ぎ火の元御用心下され候はゞ忝く存奉候とて、いひも果さず立出づるその風情、神妙なる事いふべくも非ず、今は俳友もこれ

歳尾　元祿十五年。（一六九二）

都文公　本所松坂町なる吉良家の隣に住める土屋主税。

嵐雪・杉風　服部嵐雪・杉山杉風二人とも芭蕉の門人。

までなりとて、其角幸に爰にあり、生涯の名殘を見むとて門前に走り出づれば、各〻吉良家に忍び入り候程に、

わが雪と思へばかろし笠の上

と高々と一聲呼ばはり、門を閉ぢて内を守り、塀越しに提燈ともし始終を伺ふに、その寒さ骨身に染み、女人の叫び童子の泣き聲、風飄々と吹誘うて、曉天に至りては本懷已に達したりとて、大石主税・大高源五、物穏便に謝儀を述べたること、あつぱれ武士の譽れといふべし。

其角筆蹟

文璘　姓は梅津、名は半左衛門といふ。秋田藩士にして俳人なり。

日の恩やたちまち碎く厚氷

申し捨てたる源五が精神、未だ眼前にのこり候。貴公年來の御入魂ゆゑ具に認め進じ申候。早春の内かれこれ御さしくり御出府候はゞ、かの落著も承り屆け、餘儀なく伏劍に及び候はゞ竊かに追善をも相營み申すべく存候。先は餘日もこれなく書外貴面の時を期し候　恐々謹言

十二月二十日　　其角

文璘*　様

月雪の中や命の捨てどころ

一六　折節のうつりかはり　吉田兼好

物のあはれは云々
春はたゞ花のひとへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる（讀人知らず、拾遺集）

花橘は云々
五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする（讀人知らず、古今集）

折節のうつりかはるこそ物ごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、いまひときは心もうきたつものは春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども、ことの外に春めきて、のどやかなる日影に垣根の草もえ出づる頃より、やゝ春ふかく、霞みわたりて、花もやう〳〵けしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞなやまし。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅のにほひにぞ、古の事も、たちかへり、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさまなどして、すべて、思ひすて難きこと多し。

人の戀しさも云々
わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞこひしかりける（凡河内躬恒、古今集）

灌佛の頃祭の頃、若葉の梢涼しげに茂り行くほどこそ、世のあはれも、人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水雞のたたくなど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕まつるこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、早稲田かりほすなど、とりあつめたる事は、秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおけるあした、遣水

より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人ごとにいそぎあへる頃ぞ又なくあはれなる。すさまじき物にして、見る人もなき月の寒けくすめる、二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎにとりかさねて、もよほし行はるゝさまぞいみじきや。

追儺より、四方拜につゞくこそおもしろけれ、つごもりの夜、いたう暗きに、松どもともして、夜半すぐるまで、人のかどたたき、走りありきて、何事にかあらむ、ことゞしくのゝしりて、足を空にまどふが、曉がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人のくる夜とて、魂祭るわざは、この頃都にはなきを、あづまの方には、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。（徒然草）

御佛名　十二月十九日より三日間佛名を稱ふる公事。
荷前の使　年の末に十陵八墓へ幣帛を奉らせらるゝ勅使。
追儺　十二月晦の夜に惡鬼を追ひ遣る公事。
四方拜　元旦寅の時に天皇四方及び山陵を拜し給ひて年災を祓ひ寶祚を祈らせらるゝ儀式。

一七　熊野落

大塔宮二品親王は笠置の城の安否を聞し召されむ爲に暫く南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせたまひぬと聞えしかば、虎の尾を履む恐御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隱さるべ

大塔宮二品親王　後醍醐天皇の第三皇子護良親王。延曆寺の大塔に居給ひし故に大塔宮といふ。
南都　奈良。
般若寺　奈良市の端なる奈良坂の南にあり。
主上　後醍醐天皇。

き所なく、日月明かなりといへども長夜に迷へるこゝちして、晝は野原の草に隱れて露に臥す鶉の牀に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に佇みて人を咎むる里の犬に御心を惱まされ、いづくとても御心安かるべき處なかりければ、かくても暫しはとおぼしめされける所に、一乘院の候人按察法眼好專如何して聞きたりけむ、五百騎を率ゐて未明に般若寺へぞ寄せたりける。

一乘院　奈良興福寺内に在りし一院

折節宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一防ぎ防ぎて落ちさせたまふべき樣もなかりける上、透間もなく兵已に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべきかたもなし。

「さらばよし、自害せむ。」とおぼしめして、既におしはだ脫がせたまひたりけるが、「事叶はざらむ期に臨んで腹を切らむ事はいと易かるべし。若しや。」と、「隱れて見ばや。」とおぼしめし返して、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃は未だ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して蓋をもせざりけり。此の蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて臥させたまひ、其の上に御經をひきかづきて、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てむと思召して、氷の如くなる刃を拔いて御腹にさし當て、兵「こゝにこそ。」といはむずる一言を待たせ給ひける御心の中、おし量るも尙淺かるべし。

さるほどに兵佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ。」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋開けたる櫃は見るまでもなし。」とて、兵皆寺中をいで去りぬ。宮は不思議の御命を續かせ給ひ、夢に道行くこゝちして櫃の中におはしけるが、若し又兵の立歸り委しく搜す事もやあらむと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に入りかはらせたまひてぞおはしける。

案の如く兵ども、また佛殿に立歸り、「前の蓋の開きたるを見ざりつるが覺束なし。」とて、御經を皆打移して見けるが、から

摩利支天　印度神話中に見る火星の神。俗に軍神とし隱形の軍とす。

十六善神　佛法守護の神。

熊野　今の紀伊の牟婁郡の地。

からと打笑うて、「大般若の櫃の中をよく〳〵搜したれば、大塔宮はいらせ給はで大唐の玄奘三藏こそおはしけれ。」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて門へぞ出でにける。「これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なり。」と信心肝に銘じ、感涙御袖を沾せり。

かくて南都邊の御隱れがも叶ひ難ければ、卽ち般若寺を御出あつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。御供の衆には光林坊玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河坊・武藏坊・村上彥四郎・片岡八郎・矢田彥七・平賀三郎彼是以上九人なり。宮を始め奉つて御供の者までも皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半ばにせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏

の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

此の君固より龍樓・鳳闕の内に人とならせ給ひて、華軒・香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御歩行の長途は定めて叶はせ給はじと、御供の人々かねて心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮（ダビ）・脚半（ハンキ）・草鞋をめして少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も見尤むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の檝をたえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、薄紫や藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌・吹上をよそに見て月にみがける玉津島光も今はさらでだに、長汀・曲浦の旅の路、心を碎く習なるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に著き給ふ。

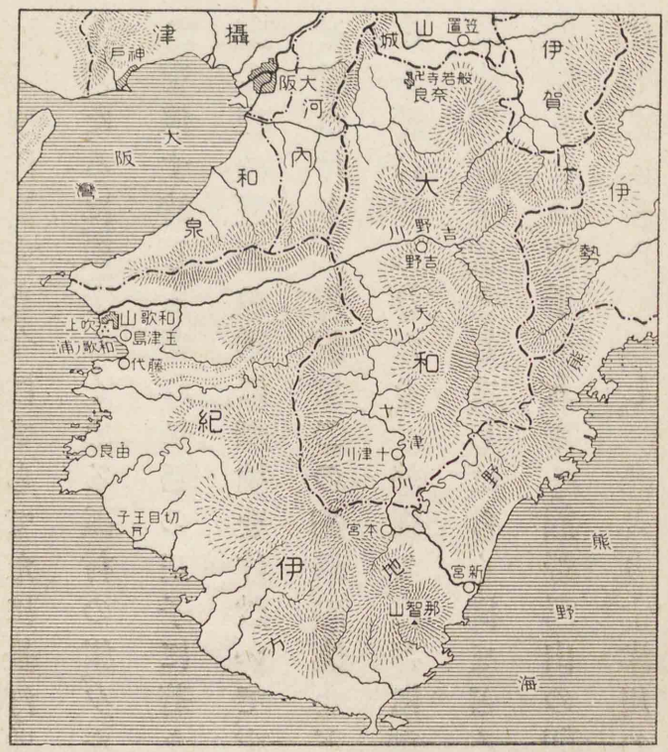
其の夜は叢祠の露に御袖を片敷いて、夜もすがら祈り申させ給ひけり。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらむと、神慮も暗に測られたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、しばらく御まどろみありける御夢に、髻（ビンヅラ）結うたる童子一人來て、「熊野三山の閒は尚も人の心不和にして大義なり難し。是より十津川の方へ御渡り候ひて時の至らむを御待ち候へかし。兩所權現より案内者に附

由良　紀伊國日高郡に在り。
藤代　同國海草郡に在り。今は名高浦と合せて内海村と云ふ。
和歌　同國同郡和歌の浦。雑賀崎より毛見崎まで和歌村、紀三井村の江灣をいふ。
吹上　同國同郡。和歌山市の西南部より雑賀村に至るまでの古名。
玉津島　同國同郡、和歌村の南なる妹背山の古名、其の海岸に玉津島神社あり。
切目　紀伊日高郡に在り。

け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候。」と申すと御覽ぜられて、御夢はすなはち覺めにけり。これ權現の御告なりけりとたのもしくおぼしめされければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねて分入らせ給ひける。

熊野三山　本宮・新宮・那智の三所をいふ。

十津川　大和吉野郡。



其の道のほど三十里が間には絶えて人里もなかりければ、或は高峯の雲に枕を欹て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渇を忍んで朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁劍に削り、見おろせば千丈の碧潭藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させたまへば、御身も草臥れ果てゝ流るゝ汗水の如く、御足缺け損じて草鞋皆血に染まれり。御供の人々も其の身鐵石にあらざれば、皆々うゑ疲れてはかゞしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手を挽いて、路のほど十三日に十津川へぞ著かせ給ひける。（太平記）

一八　寛成親王鷹狩の事

寛成　後村上天皇の皇太子にして、即位して長慶天皇といふ。

なつみ川　大和國吉野郡國樔村字菜摘の附近にて吉野川を呼ぶ。

實爲　姓は藤原。後村上天皇に仕へ大納言に任ぜらる。

寛成の親王の未だをさなうおはしける時に、若き殿上人あまた伴なはせ給ひて、なつみの川の川淀の邊りにて鷹つかはせて御覽ありけるに、いと大きなる岩のえもいはずおもしろきに、小松の生ひいでたるありけり。親王御覽じさせて、「この岩を、歸りなむ時皇居の御庭にもてまゐれ。上に奉らむ。」と實爲の中將に宣はせければ、幼き御心を推しはかりて御こと受けさせ給ふ。

鳥などあまた取らせ給ひて、歸らせ給へる時に、忠行の侍從に「岩をな忘れ給ひそ。」と宣はせければ、「民部大輔が力も強く侍れば、御あとより持て參り侍ふなり。」と啓して、皇居に入らせたまふ。御鷹の鳥など奉らせ給ひて、實爲の中將に、「ありつる岩を。」と召させ給ひけるに、「忠行の侍從の仰せごとを承りぬ。」と啓し給へば、侍從を召して、「如何に。」と尋ねさせけるに、また、「民部大輔の、御あとより。」など申し給へば、親王むづからせ給ひて、「中將にこそよく言ひつれ。などさはいふにか。」と責らせたまひければ、中將のありつる事を上に奏し給ふに、をかしがらせ給ひて、「誠に面白からむ岩こそ見まくほしけれ。民部が力こそゆゝしければ、持て來なむに、召させ給へ。」と宣はするに、中將立ちたまひて、民部大輔に、「かゝる事なむある。如何してむ。」との給へば、「すべき事こそあるなれ。」とて御庭にありける小さき岩に松の枝を取りつけて、中將とい

と重げに持ちて、宮の御前に据ゑ奉れば、「小さくこそあれ。それにはあらじ。」と、なほむづからせ給ひければ、民部大輔「さればこそ、其の岩を持ちて上の山を通り候ひしに、左右より山のさし出でゝ道のいと狹き處にて、かなひ難く、如何にせましとたゞよひ侍りしに、向ひの方より山伏の來りけるが、『岩にせかれて通られぬにこそ。のけ給へ。』とのゝしりける程に、『我もせん方なさにかくて侍り。如何にせまし。』とわびあへるに、『さらばすべき事こそあれ。』とて、珠數をおしもみ、何やらむつぶやきて祈るに隨ひて、この岩小さくなりて、やすやすと通りて候ひし程に、山伏も行過ぎしを、呼返して、『本の如く祈りなほしてよ。』と云ひければ、『また行くさきに細き道のあらばいかゞし給はむ。』と云ひし程に、實にもと思ひ侍りて、其のまゝ持て參りぬ。」と申し給へば、上より始めて有りつる人々をかしがらせ給ふに、宮の御氣色もいとよくならせ給ひて、「げにさもあらむことなり。その山伏召し返せかし。」とのたまはするに、「はや遙かに行き過ぎて、いづち行きけむも知らず。」と啓し給へば、「本意なきことにこそあれ。留めて、民部大輔の大きなるそら言をすこしきやうに祈らせむものを。」と宣はせけり。誠に行末たのもしき御事にこそといとせめて覺え侍りし。（吉野拾遺）

一九　新葉和歌集

後醍醐天皇の皇子、宗良親王、歌に堪能なり。將軍として外に戰ふ際にも、吟詠を廢し給はず。元弘以來、弘和元年までの名歌を撰びて新葉和歌集と題しけるに、後龜山天皇之を勅撰に準じ給へり。新葉集は斯かる次第にて出來たれば、從つて吉野山に關する、哀なる歌も少からざるなり。

こゝにても雲井の櫻さきにけり
唯かりそめの宿とおもへど

これ後醍醐天皇の御製なり。吉野の世尊寺に雲井の櫻と稱する一株あり。雲井は禁中をいふ。さらでだに、舊禁中の戀しくして堪へ給はざるに、吉野山中、雲井と稱する櫻を御覽じては、豈、叡感無量ならざるを得むや。悲しいかな、假

元弘　元弘元年（一九一）後醍醐天皇笠置山に行幸。

弘和元年（一三八一）後龜山天皇即位の十三年。

そめの御宿、つひの御宿となりて、延元陵畔長へに遊子をして涙に襟を沾さしむ。中院入道は、同じ雲井の櫻を詠じて、

吉野山雲井の櫻君が代に
逢ふべき春や契りおきけむ

隅田川に浮べる都鳥も、都といふことを名に負ふが爲に、業平朝臣に都の事を問はれしが、今は其の名の如く、江戸の地が都となりぬ。吉野の雲井の櫻も吉野の地に雲井が出來て、名實相應ずるやうになりたり。花の仕合は卽ち南朝の君臣の不仕合、造化の配劑亦奇なるかな。

吉野山花も時得て咲きにけり
都のつとに今やかざゝむ

延元陵　後醍醐天皇の御陵にして吉野山中、塔尾にあり。天皇の崩御が延元四年なりしを以て延元陵と稱し奉る。

中院入道　北畠親房。

業平朝臣に云々　在原業平都鳥を見て、「名にしおはばいざことゝはむ都鳥我が思ふ人はありやなしやと」と詠みし事は伊勢物語に出づ。

京都に還らせ給ひし時の云々
正平十六年（二〇二）十二月、一度京師を復し給ひしが遂に保つ能はず、翌年一月再び吉野に還幸せらる。

これ後村上天皇の御製なり。山櫻を土産にして京都に遷らせ給ひし時の御嬉しさはさぞと思はるれど、やがて又京都を保ち給ふこと能はずして、再び吉野に還らせ給ひし時の御失望や如何なりけむ。

我が宿と頼まずながら吉野山
花になれぬる春もいくとせ

これ後龜山天皇の御製なり。後醍醐天皇の皇孫、後村上天皇の皇子、吉野の山中に人となり給ひ、父祖の御遺志を嗣ぎ給はむの御志切なれども、南風競はず、終に神器を後小松天皇に授け給へり。されど知らず、京都は果して御心に叶ひたる御宿なりしや。この天皇の御母を嘉喜門院と申しま

嘉喜門院

後村上天皇の女御。姓氏詳ならず。

つる。その歌に、

櫻花さきて疾く散る習ひこそ
我が身の春のものおもひなれ

昨日は紅顏、今日は白頭、人生の老い易きは、男子とても悲歎に堪へざるに、況して女性の御身、櫻花の散易きさまを見給ひて、いかに御身を果敢なくおぼし給ひけむ。

故里は戀しくとても三吉野の
花の盛りをいかゞ見すてむ

これ「新葉集」の撰者なる宗良親王の歌なり。詩人の雅懐を見る。されど、花散らば、又いかに都の戀しかるらむ。嘉喜門院は歌を善くし給ふのみならず、最も琵琶に長じ給

へり。されど後村上天皇崩御の後は、悲哀に堪へず、誓つて琵琶を彈き給はざりき。然るに、天授三年七月七日、吉野の行宮にて、樂を張り給ひけるが、樂終りて後、後龜山天皇、門院に向ひて一曲をと切に乞ひ給ひければ、門院も恩愛の情にほだされて、一曲を奏で給ふ。其の時の御製に、

かくてのみ絶えず聞かばやそのかみの
あきおもほゆるみねのまつかぜ

昔は、父天皇この琵琶を聽きて、御心を慰め給ひけむ。父天皇今はおはさず、母君の琵琶が、亡き父天皇の形見なり。門院の御返しに、

あはれとも君ぞ聽きける今ははや
吹きたえぬべき峯のまつかぜ

「わが餘命いくばくもなし、君が昔を忍ぶといふ琵琶の音も、やがて聽き給ふに由なかるべし。」となり。二首いづれも意あはれにして詞も妙なり。宗良親王之を評して、「古の勅撰集中の唱和に比して毫も遜色なし。」と、これを新葉集に收めたまへり。（大町桂月「作文五十講」による）

二〇　鉢木　その一

ワキ次第「ゆくへさだめぬ道なれば、來し方も何處ならまし。」詞「是は一處不住の沙門にて候。我この程は信濃の國に候ひしが、餘りに雪深くなり候程に、まづ此の度は鎌倉に上り、春

信濃なる云云　信濃なる淺間の嶽に立つ煙をちかた人の見やはとがめぬ（樂平）

大井山　信濃佐久郡大井庄なる山。

友の里　同郡伴野庄。

離れ坂　同郡離山の事、輕井澤と沓掛との間に在り。

碓氷川　上野碓氷郡、碓氷山中の衆水集りて横川驛の邊にて此の名あり。

板鼻　同郡に在る町。

佐野

になり修行に出でばやと思ひ候。」道行「信濃なる淺間の嶽に立つ煙、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂、墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野の渡りに著きにけり。」ワキ詞「急ぎ候ほどに、上野國佐野の渡りに著きて候。　あら笑止や又雪の降り來りて候。　此の所に宿を借らばやと思ひ候。　いかに此の屋の内に案内申し候。」ッレ「誰にてわたり候ぞ。」ワキ「これは修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。」ッレ「易き御事にて候へども、主の御留守にて候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。」ワキ「さらば御歸りまで是に待申さうずるにて候。」ッレ「それはともかくもにて候。我は外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。」シテ「あ

上野群馬郡に在る村。

雪は云々　雪似鵝毛飛散亂、人被鶴氅立徘徊（白樂天）

今日の寒さ云々　狹布（ケフ）の里にかけて用ふ。狹布は陸奥にある細布の産地にて古歌に詠まる。

あ降つたる雪かな。　如何に世にある人の面白う候らむ。それ雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴氅を著て立つて徘徊すといへり。　されば今ふる雪も、もと見し雪に變らねども、われは鶴氅を著て立つて徘徊すべき、袂も朽ちて袖せばき、細布衣陸奥の、今日の寒さを如何にせむ。　あら面白からずの雪の日やな。　あら思ひよらずや、この大雪に何とて是にたゝずみて御入り候ぞ。」ッレ「さん候、修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、是まで參りて候。」シテ「扨その修行者はいづくに渡り候ぞ。」ッレ「あれに御入り候。」ワキ「我等が事にて候。　未だ日は高く候へども、餘りの大雪にて前後を忘じて候程に、一夜の宿を御かし候へ。」シテ「やすき御事に

て候へども、餘りに見苦しく候程に、御宿は叶ひ候まじ。」ワキ「いや〳〵見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御かし候へ。」シテ「留め申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候程に、中々御宿は思ひもよらぬ事にて候。是より十八町ばかりあなたに、山本の里*とてよき泊の候。日も暮れぬさきに一足もはやく御出で候へ。」ワキ「扨はしかと御貸しあるまじいにて候か。」シテ「御いたはしくは存じ候へども、御宿はまゐらせがたう候。」ワキ「あら曲もなや、よしなき人を待申して候ものかな。」ツレ「淺ましや我等かやうに衰ふるも、前世の戒行拙き故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便ともなるべけれ。然るべく

山本の里　上野群馬郡八幡村大字根小屋の舊名。

は御宿を參らさせ給ひ候へ。」シテ「左樣に思し召し候はゞ何とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御出で候まじ。某追付きとめ申し候べし。なう〳〵旅人御宿參らせうなう。餘りの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有樣やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一所にたゝずみて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。駒*とめて袖うち拂ふ陰もなし、佐野の渡りの雪の夕暮。斯樣によみしは大和路や三*輪が崎なる佐野の渡り、地「是は東路の、佐野の渡りの雪の暮に、迷ひ疲れ給はむより、見苦しく候へども、一夜は泊り給へや。」歌「げに是も旅の宿、假初ながら値遇の縁、一*樹の陰のやど

駒とめての歌　此の歌は新古今集に載せられたる定家の作。

三輪が崎　紀伊東牟婁郡の海邊にある村。此の西南に接して今大字佐野の名殘る。

一樹の陰云々　宿二樹下一、汲二河流一、一夜同宿、一日夫妻、皆是先生結緣。（說法明眼論）

りも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木陰、是は雪の軒ふりて、うきねながらの草枕、夢より霜や結ぶらむ。」

シテ「いかに申し候。御宿は申して候へども、何にても候へ參らせうずる物もなく候はいかに。」ツレ「折節これに粟の飯の候程に、苦しからずば參らせられ候へ。」シテ「さらば其の由申し候べし。いかに申し候。御宿をば參らせて候へ共、參らせうずる物もなく候。折節これに粟の飯のある由申し候。苦しからずば、聞し召され候へ。」ワキ「夫こそ日本一の事にて候。賜はり候へ。」ワキ「なう聞し召されうずると仰せ候。急いで參らせられ候へ。」ツレ「心得申し候。」シテ「總じてこの粟と申す物は、古へ世にありし時は、歌によみ詩に作りたるを

盧生が云々　支那の傳說に、蜀國の盧生といふ者、邯鄲の里にて粟飯の熟する間一睡したるに其の間に榮花を極めしハケ年間の夢を見たりと。

こそ承りて候に、今は此の粟を以て身命を繼ぎ候。げにや盧生が見し榮華の夢は五十年、その邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも、粟飯炊ぐ程ぞかし。あはれやげに我もまた、暫しなりともうちも寢て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なう御覽ぜよかほどまで。」地「住みうかれたる故郷の松風さむき夜もすがら、寢られねば夢も見ず、何思ひ出のあるべき。」シテ「夜の更くるについて次第に寒くなり候。何をがな火に焚いてあてまゐらせ候べき。や、思ひ出だしたる事の候。鉢の木を持ちて候。これを切り火に焚いてあて申し候べし。」ワキ「げにゞ〜鉢の木の候よ。」シテ「さん候それがし世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集めもちて候ひ

しを、斯樣の體にまかりなり、いや〳〵木數寄も無用と存じ、皆人に參らせて候さりながら、今も梅・櫻・松を持ちて候。あの雪もちたる木にて候。

鉢木

某が祕藏にて候へども、今夜の御もてなしに、之を焚きあて申さうずるにて候。」ワキ「いやいや是は思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然又御事世に出

で給はむ時の御慰にて候間、中々思ひもよらず候。」シテ「いやとても此の身は埋木の、花咲く世に逢はむ事、今此の身にてはあひがたし。」ツレ「たゞ徒なる鉢の木を、御身の爲に焚くならば。」シテ「これぞまことに難行の、法の薪とおぼしめせ。」ワキ「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候。」シテ「御出でにより我等も火に當りて候。」ワキ「いかに申し候。主の御名字をば何と申し候ぞ承りたく候。」シテ「いや某は名字もなき者にて候。」ワキ「何と仰せ候とも、唯人とは見え給はず候。自然の時の爲にて候。何の苦しう候べき。御名字を承り候べし。」シテ「この上は何をかつゝみ候べき。是こそ佐野の源左衞門の尉常世がなれる果にて候。」ワキ「其は何とてか樣の散々の體

にはなり給ひて候ぞ。」シテ「其の事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となり候。」ワキ「なうそれは何とて鎌倉へ御上り候ひて、其の御沙汰は候はぬぞ。」シテ「運の盡くる所は最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。か様におちぶれては候へども、御覽候へ是に武具一領長刀一えだ、又あれに馬を一疋つないで持ちて候。是は只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも、此の具足取つて投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、痩せたりともあの馬に乘り、一番に馳せ參じ著到につき、さて合戰始らば、」地「敵大勢ありとても、一番に破つて入り、思ふ敵と寄合ひ討ちあひて、死なむ此の身の此のまゝならば、いたづらに飢につかれて死なむ命、な

最明寺殿　北條時頼。

んぼう無念のことざふぞ。」ワキ「よしや身の、かくては果てじ只頼め、我世の中にあらむ程、またこそまゐり候はめ。暇申して出づるなり。」シテツレ「名殘惜しの御事や、はじめはつゝむ我が宿のさも見苦しく候へど、しばしは留りたまへや。」ワキ「留る名殘のまゝならば、さて幾度か雪の日の、」シテツレ「空さへさむきこの暮に、」ワキ「いづこに宿をかり衣、」シテツレ「今日ばかりとまりたまへや。」ワキ「なごりは宿にとまれども、暇申して、」シテツレ「御出か。」地「さらばよ常世。」シテツレ「また御入り。」地「自然鎌倉に御のぼりあらば御尋ねあれ。希有かる法師なり。かひがひしくはなけれども、公方の縁になり申さむ。御沙汰捨てさせたまふなと、いひすてゝ出船の、ともに名殘や惜し

只頼め云々　たゞ頼めしめじが原のさしも草われ世の中にあらむ限りは（新古今集）

むらむ。

二一　鉢木その二

シテ「いかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。なにおびたゞしく上る。さぞあるらむ。東八個國の大名・小名、思ひ〳〵の鎌倉入り、さぞ見事にて候らむ。白金物打つたる糸毛の具足に、金銀を展べたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬にのり、乘替中間きらびやかに、うちつれ〳〵のぼる中に、常世が常にかはりたる馬物具や打物の、物其のものにあらざる氣色、さぞ笑ふらむさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる痩馬の、あら道おそや。」地「急げども、弱きに弱き柳の糸の、」シテ「よれによれたる痩馬なれば、」地「うてどもあふれども、先へ進まぬ足弱車の、乘り力なければ追ひかけたり。」

ワキ「いかに誰かある。」ツレ「御前に候。」ワキ「國々の軍勢どもは、皆々來りてあるか。」ツレ「さん候悉くまゐりて候。」ワキ「その諸軍勢のなかに、いかにもちぎれたる具足を著、錆びたる長刀をもち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。」ツレ「かしこまつて候。いかに誰かある。」狂言「御前に候。」ツレ「君よりの御諚には、諸軍勢のなかにちぎれたる具足を著、錆びたる長刀を持ち、痩せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて御前

へ參れとの御ことにて候。」狂言「畏つて候。いかに申し候。」シテ「何事に候ぞ。」狂言「上意にて候。急いで御前へ御參り候へ。」シテ「何と某に參れと候や。」狂言「中々の事。」シテ「あら思ひよらずや。これは定めて人違にて候べし。」狂言「いや〳〵そなたの事にて候。その仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれてまゐれとの上意に候が、見申せば其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御まゐり候へ。」シテ「何とたとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者にまゐれと候や。」狂言「中々のこと。」シテ「さては某にて候べし。畏り候と御申し候へ。」狂言「心得申し候。」シテ「げに〳〵これも心得たり。某が敵人、叛謀人と申し上げ、御前へめし出だされ頭を刎ねられむためな。よし〳〵それも力なし。いでいで御前に參らむと、大床さして見渡せば」地「今度の早打に、上り參れる兵、きら星の如く竝み居つゝ、目をひき指をさし、笑ひあへるそ侍、その外數人竝み居つゝ、目をひき指をさし、笑ひあへるその中に、」シテ「横縫のちぎれたる、」地「古腹卷に錆長刀、やう〳〵に横たへ、わるびれたる氣色もなく、參りて御前にかしこまる。」ワキ「やあいかにあれなるは佐野の源左衞門の尉常世か。是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ見忘れてあるか。いで汝佐野にて申せしよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともその具足取つて投げかけ、錆びたりともその長刀を持ち、痩せたりともその馬に乘り、一番

にはせ參ずべきよし申しつる、言葉の末を違へずして、參りたるこそ神妙なれ。まづ〳〵今度の勢づかひ全く餘の儀にあらず、常世が言葉の末、眞か僞か知らむ爲なり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつてその汰沙いたすべきところなり。まづ〳〵沙汰のはじめには、常世が本領佐野の庄、三十餘郷返し與ふるところなり。又なによりも切なりしは、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火にたきあてし志をば、いつの世にかは忘るべき。いでその時の鉢の木は、梅・櫻・松にてありしよな。その返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、あはせて三個の庄、子々孫々にいたるまで、相違あらざる自筆の狀、安堵に取添へたびければ、」シテ「常世は之を賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ、始め笑ひしともがらも、是程の御景色、さぞ羨ましかるらむ。」地「さて國々の諸軍勢皆御いとま賜はり、故郷へとぞ歸りける。」シテ「その中に常世は、」地「その中に常世は、よろこびの眉を開きつゝ、今こそ勇めこの馬に打乘りて上野や、佐野の船橋とりはなれし、本領に安堵して歸るぞうれしかりける。」

上野や云々　かみつけぬ佐野の船橋とりはなし親はさくれどわはさかれがへ（萬葉集）

二二　與謝蕪村

藤岡作太郎

蕪村與謝氏、本氏は谷口、名を長庚といひ、後に寅と改む。字は春星、蕪村・三菓堂・夜半亭・碧雲洞・紫狐庵等の號あり。攝津

東成郡毛馬村の人。幼にして母の生家に養はる。其の家は丹後與謝郡に在り。後與謝氏を名のれるはこれが爲なり。長じて江戸に赴き、俳諧を早野巴人に學び、後京都に住みて畫と俳諧とを以て世に立てり。天明三年、六十八歳にして歿す。

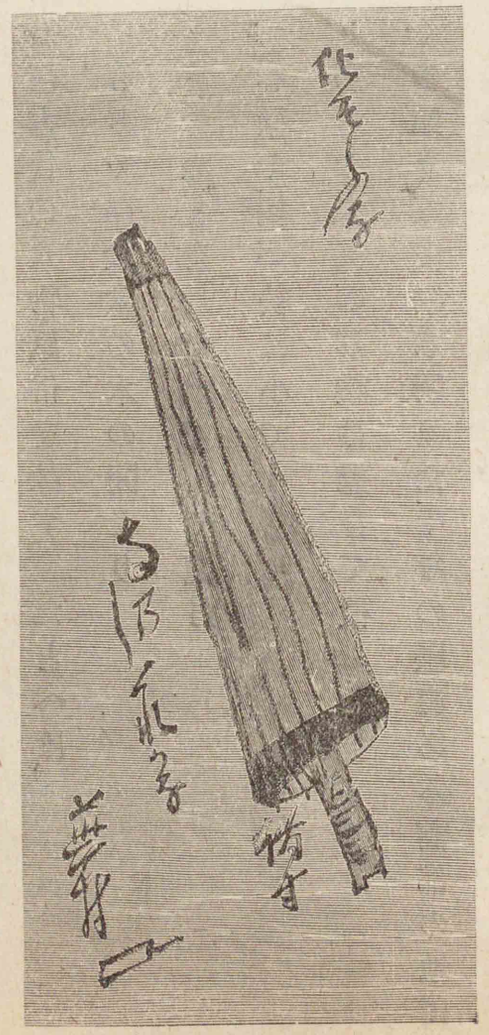
早野巴人　其角の門人にして江戸の俳人なり。一度京都に出で老後復江戸に歸る。夜半亭と號す。

天明三年　徳川十三代將軍家治の時（一七八三）

與謝蕪村

蕪村の俳諧に於けるや、世既に定評あり。今日の俳句を評する者、多くは此の翁を激賞して措かず。蓋し芭蕉以後其の道漸く腐敗し來れるを、更に清新なる格調を唱へて、其の頽勢を挽回せるいはゆる天明の改新は、蕪村を以て其の功勞者の主位に置くべきなり。句法は畫法と共に粗放奇拔、あらむづかしの假名遣やな。字義に害あらずんば、あまゝよ。

梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら



與謝蕪村筆蹟

と喝破せるは、すなはち其の畫に神韻を本とし、形似を末としたると同一筆法にあらずや。　蕪村また好んで京畿の名所及び古代の人物・風俗を詠ず。　たとへば、

春月や印*金堂の木の間より
さしぬきを足でぬぐ夜や朧月
春雨や綱*が袂に小でうちん
寒月や衆徒の群議の過ぎて後

印金堂　山城葛野郡宇多野にありし妙光寺境内の一堂。

綱　姓は渡邊。源頼光の四天王の一人。

かくの如きは山紫水明、また千年の歴史ある舊都の地に住みたればなるべし。　されど其の畫はこれに異なり、古代繪卷物などの影響も、強ひて求むればまた認むるを得べからざるに非ずと雖も、蕪村の特色は却つて新に漢畫を興せるにありて、陳腐なる狩*野・土佐は捨てゝ顧みず。　されば其の俳諧に屢〻漢語を用ひしは正に其の畫法と相應ず。

秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者
霜百里舟中にわれ月を領す

狩野・土佐　狩野派は狩野正信の開きしもの、土佐派は藤原基光及び藤原隆能の開きしもの。

詩人にして且畫家なるもの、其の所詠の畫趣あるが少からざるは當然の事なり。

柳散り清水涸れ石處々
一行の雁や端山に月を印す

巨刹に遊び、名畫に接して古人を追懷し、詩興勃然、發して句を成せりとおぼしきものまた多し。

不動畫がく宅*磨が庭の牡丹かな

宅磨　宅磨榮賀は佛像・人物を畫くの妙手あり。宅磨派を開いて子孫に傳ふ。鎌倉時代末期の人なり。子孫の中にて爲氏・爲成等は最も名あり。

雪信
清水雪信は探幽の姪にして女流畫家中古來第一と稱せらる。此の他同名の畫家二三見ゆ。

相阿彌
畫家にして造庭・詩歌・香茶等に通ず。足利義政に仕ふ。

大文字
毎年八月十六日夜、京都東山如意嶽にて大の字の形に火を焚く行事。

大雅
姓は池野、有名の畫家にして、奇行多し。德川十代將軍の頃の人。

雪信が蠅うちはらふ硯かな

相阿彌の宵寢起すや大文字

蕪村が畫道の功も敢て俳諧に讓らず。されど生時は畫名いたく著れず。其の聲價は歿後にいたりて高くなりぬ。これ蕪村は大雅に比するになほ數年の長にして、其の若く盛なりし頃は未だ文人淡泊の畫を賞する者少かりしと、又主として其の俳名に蔽はれしとに因れるなるべし。其の畫或は彭百川に學べりといへども、蕪村みづから稱して、「吾に師なし古今の名畫畫を以て師とす。」といへり。其の元・明諸大家の遺墨を研究して、以て一家を成せる事推して知るべし。

彭百川
彭城眞淵の事。百川は號なり。德川八代將軍頃の人。

蕭何云々
蕭何・韓信は共に漢高祖の臣、韓信初め用ひられずして去りしが、蕭何其の才を惜しみ追うて之を連れ歸れり。

玄德云々
玄德は蜀漢の帝劉備。始め孔明を用ひんと欲して三度其の草廬を訪ふ。

慈照寺
銀閣寺の事。

蕪村の畫がくところ減筆の粗畫多く、又好んで芭蕉以來の俳諧の名家の像を畫がく。運筆簡にして狂、恰も兒戲の如くにしてしかも興味津々たり。屢〻題するに俳句を以てす。後世俳畫と稱する略畫は實に此の翁に至りて興りしなり。然れども蕪村の作品はただ此の種の粗畫のみにあらず、緻密なる山水等の畫も亦往々にして存す。其の畫を作るや、一室に籠りて人の入るを禁じ、獨坐して思を凝せりといふ。蕭何、韓信を追ひ、玄德、孔明を訪ふ圖の屏風、野馬圖屏風は其の精細なる筆致を見るべく慈照寺の襖繪なる水村圖・群仙圖等は其の疎放なる畫趣を察すべし。何れも渠が傑作なり。蕪村嘗て讃岐丸龜に遊び、其の地の妙法寺の襖に畫が

く。世にこれを蕪村寺と稱し、寒山拾得・水墨蘇鐵・山水等の大作今なほ存すといふ。

寒山拾得　支那唐時代の隱士寒山子と若僧拾得との相携ふる風姿を畫けるもの。

蕪村の畫瀟洒にして飄逸、常人の臆測に及び難きこと頗る大雅と相似たり。二人ともに斯道の天才にして、其の妙趣は他の企及を許さず。然れども二人に差別すべき所亦多し。大雅を天上の神とすれば、蕪村は下界の仙なるべく、文人畫家者流は後者を以て俗氣多しとして取らず。田能村竹田評して、「大雅は正にして譎ならず。春星は譎にして正ならず。」といへり。されどなほ二人を品して、「均しくこれ一代覇をなす好敵手。」と評し、更に蕪村を稱して曰く、「用筆傅彩全然たる明人。布置點景、これを邊邑僻境有るところの寔景に取る。故に景は新に、法は古く、意を用ふること最も深し。高名の下虛士なしとは洵に誣ひざるなり。」と。泛々たる世人の褒貶は取るに足らず。名流竹田の品隲は以て蕪村の價を定むべきなり。（日本繪畫史）

田能村竹田　豐後岡の藩醫の家に生れ、畫を以て名高し、德川末期の人。

二三　今様三首

蓬萊山

蓬萊山には千歳ふる
松の枝には鶴巣くひ
よみ人知らず

萬歳千秋かさなれり
巖のそばには龜あそぶ

舊き都

（五節閑郭曲）

藤原實定

藤原實定　源平時代の公卿。世に後德大寺左大臣と云ふ。

ふるき都を來て見れば　淺茅が原とぞあれにける
月の光はくまなくて　秋風のみぞ身にはしむ

（源平盛衰記）

一天四海　よみ人知らず
治まり靡く時なれや　一天四海のうちのみか
人の國まで日の本の　唐土が原も此のところ

（吾妻鏡）

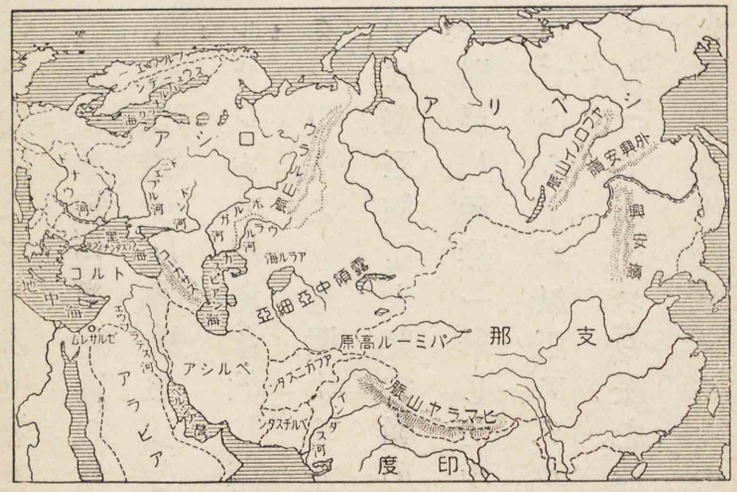
二四　蓋世の雄成吉思汗

歐羅巴の中世史を披いて成吉思汗の偉業を見る者、誰か悵然として卷を掩ひ當年虎踞龍盤の大版圖、今日擧げて白皙人種の手に歸するを慨せざるものぞ。

Indus　Caucasus　Yablonoi　Judaea
Euphrates　Ural　Pamirs　Jerusalem
Persia　Volga　Aral　Turkestan
Himalaya　Caspian

第十三世紀、西歐諸國の侯・伯・騎士が、方に十字軍前後七回の戰役に困憊し、萬骨空しく*ジュデアの野に枯れ、碧血徒に*ゼルザレムの聖地を蝕し、而も竟に基督の靈跡をば*トルキスタンの手より奪還する能はずして止みたりし時、彼、成吉思汗は東亞細亞大興安嶺の西、*ヤブロノイ山脈の南、遊牧の民に崛起し、猛然一擧して中央亞細亞の大平原を席捲し、再擧して*パミール以西*アラル海・*カスピアン海の湛ひ、黑海の波うち、*コーカサスの脈を横たへ、*ウラル・*ボルガ諸江の流るゝ地を略し、更に*ヒマラヤの聳え、*インダス・*ユウフラテスの注ぎ、*ペルシヤ灣・地中海の劃する國を降服せしめ、長驅して*ド

Don
Dnieper
Donau
Baltic



ン・ド*ニエプル兩河の走り、ド*ナウ河の潤ほす地より、バ*ルチツク海に及べる東歐羅巴の大平原を蹂躙し、白人をして、殺戮時代と呼んで震駭し、其の骨を寒うし、其の心を悸かしめたるに非ずや。地球ありてより以來英雄の大陸を席捲せし者、それ幾許ぞ。歷史ありてより以來、君主の邦土を削平せし者、亦幾許ぞ。然れども規模の大、版圖の廣、我が成吉思汗の如きは之を前にして其の儔なく、

之を後にして其の倫を絕す。寔に以て上下古今の獨歩とすべし。詩人の形容して拔山蓋世の雄と云ふ者、宇內千古の史上獨り之を成吉思汗に於て觀るのみ。誰か世界歷史は白皙人種の歷史なりといふぞ。偉大なる中世の歷史を過去に有する蒙古民族、それ果して永久に白皙人種の下風に俛首すべきか。悠遠なる未來を以て、過

成吉思汗

Alexander　Hercules

去二三世紀に比す、此を以て彼を推すは固より蠡を以て大海を測るに異ならず。太陽がハーキュリーズに向ひて進行すること更に近く、地球が軌道を回轉すること更に幾度を加ふる閒に、世界歴史の自ら其の生面を變革するあり、千載の下蒙古民族當年の雄圖が再び史卷を照耀して、白皙人種の感慨に堪へざること、猶蒙古民族の今日に於けるが如きの日なしといふべからず。蒙古民族の一大記念たる成吉思汗の雄圖、豈永く宇宙の閒に錄して傳へざるべけんや。世人が、アレキサンダー以下の徒を知つて、蒙古の古英雄に成吉思汗の如きあるを知らざるは抑、何の迂愚ぞ。成吉思汗は獨り蒙古民族の一大記念たるのみならず亦實に世界古今に匹儔を見ざる蓋世の雄たりしなり。

露西亞近代の名將ミハイル、イグナチエフ將軍は、嘗て蒙古當年の戰術を調査して曰ふ、「成吉思汗の戎器・兵仗は勁利にして戰鬪に適し、軍團整肅にして隊伍秩序あり、紀律嚴正にして號令明晰に、將帥の運謀亦周緻にして、戰術・戰法共に當時に超軼し、能く兵を編成して之を統率し、乃ち出で、戰へば必ず敵の中堅を擣き、巧に敵の障礙を避けたり。軌模淵大にして、睿知神謀あり。戰鬪概ね驍騎を用ひ、其の數幾千萬あり。而も用兵の妙を得たる、之を當今僅かに三四千の兵を馳驟し得るに過ぎざる處に運用するも毫も隘きを感ぜず。政治亦條理あり、行政の紀綱井然として紊れず。此の

如くにして方千里の平原に流寓牧畜して、定所なき諸部の民族を提げて悉く己の統轄に服せしめ、之を畫一せる制度の下に隷せしめて茲に一大陸軍を編成せり。其の攻むれば必ず陷れ、戰へば必ず捷ち、一鼓して廣大なる邦土を略有せし者、固より他由あるに非ず。」と。乃ち成吉思汗戰法論を著せり。

コリーツエン將軍之に序して曰ふ、「成吉思汗が一大侵略を逞うせし者、希臘・羅馬其の他後代の戰勝者の如く、隊伍整備せる歩兵を用ひしが故に非ず。彼の率ゐしは中央亞細亞遊牧の土民にして、其の兵制極めて異類なるも、編制整然、軍紀森嚴にして、當時歐羅巴・亞細亞諸列國の及ぶべからざるものありしに由る。又其の內治・外交・軍政・戰略竝に絕倫の智謀ありしに由る。故に人として征服せられざるなく、兵として擊摧せられざるなく、露國の如きも、勢ひ攻略を免れざりき。而して爾後二世紀間、蒙古韃靼人が露國を維繫せし間に、露國は其の軍政・戰略の妙訣を彼に資り、其の資り得し軍政・戰略は、傳へて彼得大帝に及び、彼等の未だ革新振興するに及ばざる以前に於て、卻つて其の軍政・戰略を用ひて、一擧して彼等を疆外に驅逐するを得たり。」と。

イグナチエフ將軍は更に蒙古民族當年征服の迅速なりしを驚嘆して曰ふ。「普く宇內を通覽するに、僅少の年月を以て廣大の疆域を開拓せること、成吉思汗の如きは、未だ嘗て

Greenwich
Constantinople

見ざる所なり。成吉思汗汗位繼承の初、旗籍の戸數、約一萬三千のみなりしが、後其の征服せし民族の數、凡て七百二十部の多きにおよび、其の繼承者の時にいたりては、奄有せしところの全版圖、方に現下の支那全土、印度の北部、朝鮮半島、全中央亞細亞の地、露西亞帝國の大半、及びインダス・ユウフラテス兩河閒に横たはる南部亞細亞を包括したり。これら諸國を討伐征服せしは、纔かに六七十年の短日月に過ぎざりき。」と。

*グリニッチ東經三十度、乃至百三十度閒に横たはれる土地、*コンスタンテノプル附近より朝鮮咸鏡道附近に至るまで、東西一直線に六千英里、卽ち我が二千五百里、是、成吉思汗及び其の子孫が、僅々六七十年閒に削平せし所なりき。而も其の功は盡く之を成吉思汗の創業に歸せざるべからず。誠に彼の如きは千古未だ嘗て見ざる最大蓋世の雄と云ふべし。（太田三郎―「成吉思汗」による）

Attica

二五　希臘の文明

厨川辰夫

地中海の浪に洗はれた南歐の美鄕、山水明媚なる希臘半島の一角*アテイカの州に、光芒燦然たる文化の輝きを見たのは、今から云へばもう二千年にも餘る遠いむかしであつた。その豐麗な思想と藝術とが、ながく百代の民衆を動かして、影響感化が遙かに現代にまで及んでゐるといふ事實は、そ

Paul

れ自らに於て既に世界文明史上の一大壯觀たるを失はないのである。

希臘の文化は忽ち他國に傳はつた、緣もゆかりも無い、否、どうかすると敵であつた他の民族をさへ感化した。羅馬人が先づ之を學んだのは云ふまでもないとして、あの使徒ポ*ーロの如き、基督教思想を提げ來つて希臘人を愚なりと嘲つた者が、尙且希臘の詩人に學ぶところあつたのは面白い。

爾後この思潮の勢は一張一弛、時に或は隱れ或は現はれて、複雜多趣なる歐洲人文史の根柢を流れた。羅馬帝國亡んで後は、暗黑の中世に隱るゝ事幾百年、この思潮は遂に猛然として、近世文明の淵源である文藝復興期の伊太利にあら

Homer
Pericles

Winkelmann
Goethe
Nietzsche

はれたのである。それからまた暫くすたれてゐたのが、十八世紀になつてヰ*ンケルマンの古代藝術史論となり、轉じてまたゲ*エテにうつされて、殆どすべての十九世紀以後の文藝に影響した。近代に於ては、ニ*イチヱの思想こそ最も大膽にまた最も痛快に、この希臘思想を宣傳したものであつた。

おのづから山水秀麗の氣にはぐくまれ、また民族固有の富贍なる想像力に彩どられて、希臘の國土にあの美しい神話や傳說の出來たのは、今から約三千年前のホ*ーマアよりも、なほもつと遠い遠い昔であつた。それが漸く進んで遂に紀元前五世紀の頃、ペ*リクレスの時代に至つて、文物典章の

七丘の都
羅馬市の事。

美は備り、詩文藝術の上にも千古不朽の大作が現れた。そして之が後の所謂希臘思潮の源泉である事は、西洋史を繙いた人の誰しも知る所であらう。

ちやうど日本が印度や支那から儒・佛二教の思想を受入れて、之を同化したやうに、この希臘思想をその儘繼承したものは羅馬人であつた。「七丘の都」を中心とした羅馬大帝國の文明は、確かに人類が嘗て建設した最も光榮ある偉業ではあつたが、その根柢をなしてゐたものは、矢張希臘思潮に外ならなかつた。

併し羅馬人は、希臘人のやうな聰明の智力と節制の美德を缺いた。肉の歡樂を求めて飽くことなく、情熱の奔放に任せては、遂に頽廢靡爛の極度に達しなければ止まない南歐ラテン民族の特徴を、彼等は遂に遺憾なく發揮するに至つた。唯さへ現世的・個人的・自然主義的の希臘思想が、この節制なき羅馬人の生活に移された結果として、羅馬帝政の末路は甚だしく荒廢した。文明爛熟期の常として、人は唯樂欲の巷に本能の滿足を求め、歡樂の毒酒に醉うて、又他を顧みなかつたのである。後代の史家が呼んで羅甸頽廢期といふ時代は、卽ち此の帝政の末年である。英國十八世紀の歷史家エドワード、ギツボンは嘗て羅馬の廢墟を逍遙し、古の帝王が榮華のあとを弔うて懷古の感に堪へず、椽大の筆を揮うて、遂にかの羅馬衰亡論七卷の大著を完成した。異

Latin

Edward Gibbon

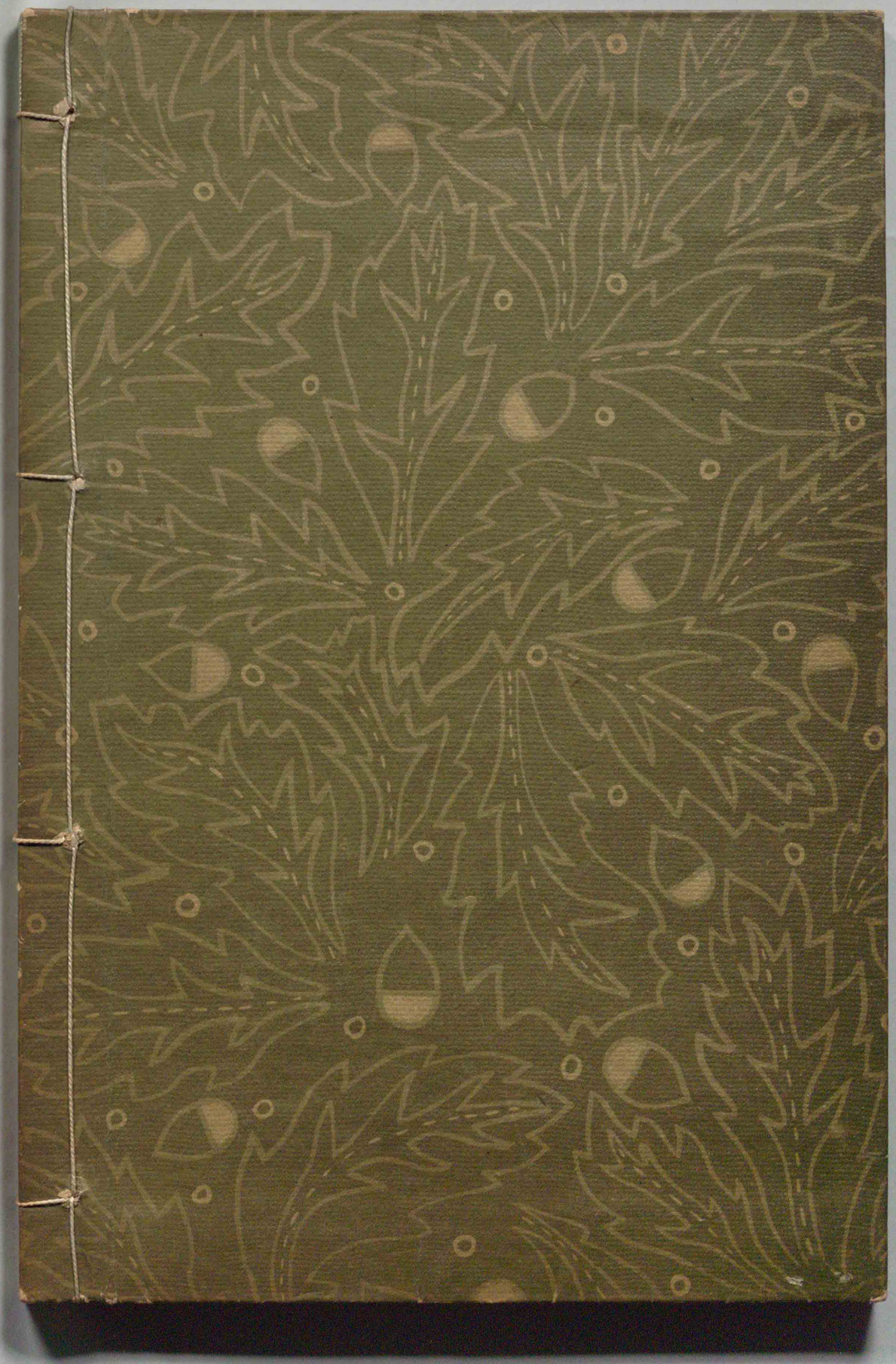
教文明爛熟の時代は殆ど餘蘊なきまで本書の中に詳述されてある。（文藝思潮論）

大正國語讀本　卷八　終

大正五年九月廿五日印刷
大正五年九月廿八日發行
大正五年十二月廿二日訂正印刷
大正五年十二月廿五日訂正發行

著作權有

著作者　東京市麹町區土手三番町三十六番地　保科孝一
發行者　東京市牛込區白銀町貳拾番地　合資會社育英書院　右代表者　目黑甚七
印刷者　東京市京橋區西紺屋町二十七番地　佐久間衡治
印刷所　株式會社秀英舍

大正國語讀本　全拾册
定價
卷一・二　各金參拾四錢
卷三・四　各金參拾貳錢
自卷五至卷十　各金參拾錢

發行所　東京市牛込區白銀町二十番地　振替口座（東京）七四二番　合資會社育英書院
發賣所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座（東京）二八〇九番　目黑書店